



渓仁会グループCSRレポート2009

私たちの30年

CORPORATE SOCIAL RESPONSIBILITY REPORT

地域とともに
保健・医療・福祉の未来を
見つめて。



 溪仁会グループ
医療 法人 溪仁会 社会福祉 法人 溪仁会

渓仁会グループの事業理念

事業理念

安全感と満足の提供
Offering a Sense of Security and Satisfaction

信頼の確立
Building the Foundations of Trust

プロフェッショナル・マインドの追求
Attaining a Professional Mind

変革の精神
Developing the Spirit of Change

ミッション

保健・医療・福祉の各サービスをシームレスに提供し、
地域住民の生涯に亘るニーズに応え支援を行う。

サービス 憲章と 行動基準

私たちは、質が高く効率的なサービスを提供するため、
グループの総力を挙げ(グループ連携)、地域の関係機関との連携を密にし(地域連携)、
他の関連事業との提携を展開し(業務提携)、患者様・ご利用者様との協同活動を通じて、
満足度の高い保健・医療・福祉サービスを目指します。

そのために…

1. 私たちは、患者様やご利用者様にとって最高の満足度を追求します。……………顧客満足
2. 私たちは、最高のサービス品質を追求します。……………品質管理
3. 私たちは、人権と倫理を尊重したサービスを提供します。……………人権尊重
4. 私たちは、地域社会の一員として遵法を徹底します。……………遵法精神
5. 私たちは、常に技術の向上と革新に努めます。……………技術変革
6. 私たちは、日々研鑽に励み、人格と知識の向上に努力します。……………教育研修
7. 私たちは、職種を超えたチーム活動に徹します。……………チームワーク
8. 私たちは、サービス提供に関わる情報を公開します。……………情報公開
9. 私たちは、各機関との地域連携を重視し地域に根ざすサービスを供給します。…地域重視
10. 私たちは、環境を保護するためにあらゆる配慮を尽くします。……………環境保護
11. 私たちは、お互いを尊重し、ゆとりある職場環境を追求します。……………職場環境

渓仁会グループ
CSRレポート2009
私たちの30年

CORPORATE
SOCIAL RESPONSIBILITY
REPORT



CONTENTS

04	渓仁会グループ 社会的責任30年の歩み
10	渓仁会グループの今～組織一覧
12	この道をひらく そこにあるプロフェッショナル・マインド
24	渓仁会グループの現在・過去・未来に寄せて 先輩からのメッセージ
26	わたしたちのCSR 医療法人渓仁会 手稲渓仁会病院
30	わたしたちのCSR 医療法人渓仁会 札幌西円山病院
34	わたしたちのCSR 医療法人渓仁会 定山渓病院
38	わたしたちのCSR 医療法人渓仁会 渓仁会円山クリニック
42	わたしたちのCSR 社会福祉法人渓仁会
46	ステークホルダー・ダイアログ2009 より良い関係をつくる 情報コミュニケーションを考える
50	環境報告 人に、環境に、やさしい経営をめざして
52	トップメッセージ 渓仁会グループ最高責任者 医療法人渓仁会 理事長 秋野 豊明
54	第三者意見

編集方針

このレポートは、渓仁会グループが果たすべきCSR（社会的責任）を明らかにし、その実現に向けた取り組みを報告しております。2009年は当グループの創立30周年に当たることから、原点にある志を見つめ直し、さらなる未来へつなげることを目的に、「社会的責任30年の歩み」を巻頭企画といたしました。

また、当グループが取り組んでいる重要なテーマについて、職員の思いを通してわかりやすくお伝えしたいという願いから、職員にスポットを当てた企画を多く取り入れました。渓仁会グループを構成する一人ひとりの職員がどのような思いでそれぞれの仕事に取り組んでいるのか、その姿勢を中心に報告しております。

多くの皆さんにこのレポートをご覧いただき、当グループと社会との相互信頼、ステークホルダーの皆さんとのコミュニケーションを深めることができれば幸いです。

信頼性への配慮

CSR分野に詳しい有識の方々からいただいたご意見やアドバイスをもとに、公正な視点から情報公開しております。第三者意見としては、東京交通短期大学学長の田中宏司氏に所見を依頼いたしました。また、当グループのWebサイト上でも、同内容の情報を公開しております。

CSRレポート掲載URL ▶ <http://www.keijinkai.com>

報告対象範囲

2008年度（2008年4月～2009年3月）の活動を中心に、2007年度以前や2008年度以降の情報も記載しています。環境パフォーマンスデータの対象範囲については、渓仁会グループの中から環境保全上の重要度に応じて決めています。

30年のあゆみ

組織一覧

この道をひらく

わたしたちのCSR

ステークホルダーとの対話

環境報告

トップメッセージ

渓仁会グループ 社会的責任30年の歩み

30年
のあゆみ組織
一覧

この道をひらく

わたしたちのCSR

ステークホルダーとの対話

環境
報告

トップメッセージ

より良い保健・医療・福祉を提供するために。

変革を繰り返しながら、組織として永続していくために。

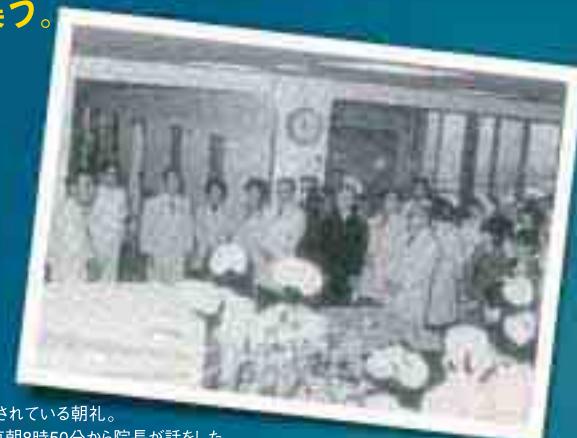
渓仁会グループはなにを思い、なにを実践してきたのだろうか。

その歴史を振り返る。

1978年6月着工。傾斜した地形の中、山を開いて建築。当時の道路は幌見峠に向かう細い山道で、雨が降ると泥道。周辺には民家もほとんどなかった。

日本一の老人病院をめざし、 62名が西円山病院に集う。

1979年10月、職員公募による院訓を制定すると発表。全員が参加することで西円山病院の理念が制定され、連帯感が生まれた。



開院以来ずっと実施されている朝礼。
当時は玄関ドアで毎朝8時50分から院長が話をした。
全職員による院訓の唱和も当時から行われている。

草創

[1979年～1984年]

どうしたら良い老人医療を実践できるのか? 老人病院としての先駆的な取り組みが始まる

1979年6月11日、職員たちが西円山病院に初出勤した。直ちに院長・加藤隆正が辞令を交付。草創期の渓仁会を担つていく62名だった。

札幌市中央区円山西町。開院にあたって候補地はいくつかあったが、環境が良く将来性がある場所として、この地が選ばれた。

遡ること6年、老人福祉法が改正され、老人医療の無料化が始まっていた。「福祉元年」と呼ばれた時代である。しかし途端にオイルショックが日本経済を根底からゆさぶった。老人医療費無料化の数年後には医療費高騰が社会問題になっていた。

医療の荒廃が叫ばれていた。老人病院は暗く、陰惨なイメージ

というものが社会一般の風評であり、老人病院は決して社会から歓迎される存在ではなかった。そのような社会情勢のなかで、老人専門病院である西円山病院が開院した。

7月1日の開院日、西円山病院に初めての患者さまが訪れた。1カ月後、146床は満床になった。市内在住、平均年齢75歳、広範囲に褥瘡や拘縮があり、家庭や施設でも介護できない患者さまが多かった。「当院では絶対にこんなものはつくらない」。加藤院長はそう決意し、職員にも徹底を図った。患者や家族によろこばれる病院にしたい、日本一の老人病院にしたい。患者さま中心の良い医療の実践は、今はあたり前のことでも、それまでの老人病院では考えられないことだった。

81年、社会福祉法人南静会設立。翌年、社会福祉法人南静会が経営主体の特別養護老人ホーム西円山敬樹園を開設した。

- 西円山病院開院、院長に故加藤隆正就任
- 西円山病院正式開院（7月1日）
- 歯科診療開始（8月）
- 看護会議発足（院長、事務局長、栄養士、付添リーダー、MSWなどが患者さまの日常生活について検討）（9月）
- 職員親睦団体「むつみ会」発足（9月）
- 職員公募による院訓制定（10月）

- 患者さまの誕生会始まる（1月）
- 付添婦教育開始（婦長がプログラムを作成）
- きれいな環境をめざし山の斜面等の病院周りに院長自ら率先して植樹（4月）

- 保育室（院内の個室2室を利用）開設（6月）
- 院長による初の院内講演会（6月）
- 第2期工事中央棟完成（8月）
- 眼科診療開始（9月）
- 院内研修会「老人患者の口腔ケア」（12月）
- 道警音楽隊による入院患者慰問（12月）

- 婦人科診療開始（2月）
- 業務改善提案制度スタート（3月）
- 「患者介助の手引き」作成（6月）
- 「口腔ケア健康手帳」作成（7月）
- 社会福祉法人南静会設立（12月）

- 付添婦教育に茶道を導入（4月）
- CTスキャナーを導入（10月）
- 社会福祉法人南静会 西円山敬樹園開設（4月）

- ◎老人保健法施行（老人医療費支給制度の廃止、老人医療費の有料化）
- 特例許可老人病院となる（4月）
- 「敬老の日」職員全員で祝う（9月）
- 定山渓病院と連携を始める（定山渓病院の開院は1981年5月）

1987年に完成した手稲渓仁会病院。患者主体の医療に徹するという理念を掲げて開院。最新鋭の医療機器と優秀なスタッフを揃えた高機能総合病院としての発展に期待が高まった。

院内研修会。創業以来今日まで、継続的な教育・研修を行い、専門的な知識・技術の習熟、チーム力の強化、接遇力の向上など、さまざまに取り組んでいる。

定山渓病院を統括。 手稲渓仁会病院スタート。

1988年、札幌市立高等看護学院老人看護学実習の受け入れを実施。老人看護のあり方や看護活動をともに考えることを目的とした。

1989年7月、西円山病院が開院10周年を迎えた恩返しとして「高齢化社会を考えるシンポジウム」を後援。600名を超える人々の参加を得た。

改
組

[1985年～1989年]

福祉的な活動を多く導入 施設とサービスの両面から体制づくりを始める

80年代の半ば、日本の病院市場は典型的な供給過多にあった。「中小病院の経営は不安定、将来は淘汰されるだろう」。そんな声がささやかれる中、加藤院長はある取引先からの要請で、定山渓病院の経営を任せられることになった。

同病院の再建にあたって力を入れたのは、職員の研修だった。それまで患者さま本位の医療がなされていなかったことを大きな問題として掲げ、職員の意識改革に取り組んだ。85年、西円山病院と定山渓病院を統括し、医療法人渓仁会へと改組した。

85年は、西円山病院が新棟建設に着手した時でもある。老人医療の抱えている現実的な問題をどうしたら世間一般の皆

さまに理解していただき、信頼されながら解決に導いていくのか。そのためには受け入れられる条件整備が必要と考え、施設とサービス両面の体制づくりが始まった。

新棟の開棟にともない、院内への新しい息吹として福祉的な活動を多く導入した。老人介護研究、医療福祉研究、ボランティア事務、レクリエーションなどのグループを設け、患者さまに対する生涯学習へのアプローチ、地域社会に向けてのサービス活動に取り組み始めた。今現在も活躍を続けているボランティアグループ「銀の舟」が発会したのはちょうどこの頃である。

また87年、介護の質を高めるために「在宅療養者家族の会」を発足、89年には看護職の立場から老人看護の向上をめざし、総合的な研修研究を行う「北海道老人看護研究会」(会長・西円山病院看護部長)を全国に先駆けて誕生させた。

1985 昭和60年	<ul style="list-style-type: none"> ◎第一次改正医療法施行(地域医療計画による病床数の総量規制スタート) ●医療法人渓仁会に改組、理事長に加藤隆正就任(1月) ●西円山病院訪問看護開始(4月) ●西円山病院ボランティア「銀の舟」発足(11月)
---------------	--

1986 昭和61年	<ul style="list-style-type: none"> ◎老人保健法改正、老人保健施設創設 ●医療法人渓仁会の初の入社式(4月) ●西円山病院新棟完成(5月)病床数942床、作業療法科・言語療法科を新設 ●シルバー教室開講(7月) ●広報紙「健康なまき」創刊(7月)
---------------	---

1987 昭和62年	<ul style="list-style-type: none"> ●老人介護スクール開講(9月) (道内の病院では初の試み) ●西円山病院医療福祉部門独立(12月)
1988 昭和63年	<ul style="list-style-type: none"> ◎老人保健施設運営開始 ●リハビリ施設基準取得(5月) ●「在宅療養者家族の会」発足 ●斎藤十朗厚生大臣が西円山病院来院 ●渓仁会マーク制定 ●手稲渓仁会病院開院(12月)

1989 平成元年	<ul style="list-style-type: none"> ●実習生受け入れ(6月) ●老人の専門医療を考える会シンポジウム開催(7月) ●手稲渓仁会病院が救急病院指定(7月) ●老人保健施設開設準備室開設(9月) ●3病院合同による初の「合同研究発表会」開催(11月)
	<ul style="list-style-type: none"> ◎高齢者保健福祉推進十カ年計画策定 ●渓仁会統括本部を設置(1月) ●コミュニティホーム白石開設(4月) ●高齢化社会を考えるシンポジウム(7月)

拡大

「いつでも」「誰でも」「どこでも」を実行
保健・医療・福祉の総合事業体へと大きく成長

地域、社会構造の変化にともない、それまでとは異なる医療サポートの必要性が高まっていた。社会福祉の総合化ということが言われるようになり、それは医療や保健との関連を抜きにしては考えられない。渓仁会グループは保健と医療と福祉のトータルなサポートを一つの大きな社会サービスと捉え、いかにして網の目を細かく大きくするかをテーマに据えた。

1993年、渓仁会グループは在宅ケア関連事業を展開した。医療と福祉のネットワーク、コーディネートの専門性は不可欠。老人問題にても、在宅、病院、福祉施設、民間シルバー産業、デイケアやデイサービス、ショートステイやナイトケアなど、一人ひ

[1990年～1999年]

とりの利用者の適性を考えなければならない。渓仁会グループはそういった社会資源の提供に努めた。

90年代初め、一般企業では「社会的責任」という言葉が使われるようになっていた。企業が社会の一員としてどのような行動をとるべきかを問うという考え方である。私たちが担う医療にこの言葉を当てはめたとき、自分たちは何をしなければならないのか。当時、加藤理事長はこう述べている。「いつでも診ることができますという態勢、どんな病気やケガでも診ることができます、当院でできなければすぐに他の病院を紹介します、というプロとしての深い認識、そして病院で診ることができなければどこへでも往診できます、という機動性のある動き。これらによって、いかに安心していただくことができるか。この姿勢こそが、医療としての社会的責任たりうるところ」

1990 平成2年	<ul style="list-style-type: none"> ●円山クリニック開設(1月) ●西円山病院患者家族の会設立(12月) ●手稲渓仁会病院看護部が手稲高校の生徒を招いて「ふれあい看護体験」始まる
1992 平成4年	●西円山病院で献血運動始まる
1993 平成5年	◎第二次改正医療法施行(特定機能病院や療養型病床群を制度化) ●はなす訪問看護ステーション開設
1994 平成6年	●西円山病院老人デイケア施設基準認定 ●西円山敬樹園ホームヘルパーステーション事業開始(10月)

1995 平成7年	<ul style="list-style-type: none"> ●訪問看護ステーション円山開設(7月) ●コミュニティホーム白石ホームヘルパーステーション事業開始(10月) ●西円山病院NCMシステム構築
1996 平成8年	<ul style="list-style-type: none"> ●カームヒル西円山開設・西円山敬樹園デイサービスセンター開設(4月) ●訪問看護ステーション本郷開設(5月) ●定山渓病院が終末期医療に取組開始 ●定山渓病院老人デイケア施設基準認定
1997 平成9年	<ul style="list-style-type: none"> ●手稲渓仁会病院に救急部新設(4月) ●(株)ハーティサポート設立

1998 平成10年	◎第三次改正医療法施行 <ul style="list-style-type: none"> ●コミュニティホーム八雲開設(4月) ●(株)ソーシャル設立(6月) ●定山渓病院が病院機能評価長期療養種別において日本で第1号の認定
1999 平成11年	<ul style="list-style-type: none"> ●デイサービスセンターすまいる開設(4月) ●ホームヘルパーステーションすまいる事業開始(4月) ●訪問看護ステーションおおしま開設(宮城県気仙沼市)(5月) ●あおばデイサービスセンター開設(12月) ●定山渓病院が抑制廃止宣言(7月)

挑戦

国際的基準で「質」をチェック。 めざすものは“最良”的サービス。

手稻溪仁会病院は長期的な人材育成にも取り組んだ。厚生労働省の臨床研修指定病院として、2001年から米国ピッカーズ大学のプログラムを導入。「全国から医師が集まつくる病院」として有名になった。

2001年度、厚生労働省の「ドクターヘリ導入促進事業」スタート。道内での本格導入を検討しようと、手稻溪仁会病院が基地病院となり「北海道ドクターヘリ運航調整研究会」が2002年2月に立ち上がった。

2001年11月、定山渓病院看護部と経営管理部が中心となり、「第3回全国抑制廃止研究大会」開催。定山渓病院の中川翼院長が大会長を務めた。

[2000年～2003年]

何が良い病院か？ 何が良いサービスか？ ISO認証登録への取り組みを開始する

2000年、高齢化率17.2%。医療保険制度のみならず、年金や福祉のあり方も見直しされる時期に入っていた。その一つが介護保険法の導入だった。要介護度認定という新しい基準が設けられ、利用者は医療やサービスそのものの質で病院を選択する時代になった。ほんとうの意味の「品質」を評価してもらえることは、満足度とサービスの質の向上をめざしてきた溪仁会グループにとって、自らを振り返る絶好の機会になった。

何が良い病院なのか。何が良いサービスなのか。自分たちは最良のサービスだと思っていても、ほかの人たちはどう評価しているのだろうか。サービスの質をチェックする意味で、溪仁

会グループは国際規格であるISO9001(品質管理)、ISO14001(環境管理)の認証登録への取り組みを開始した。

00年11月の西円山病院を皮切りに、01年1月にコミュニティホーム白石、定山渓病院、同2月に円山クリニック、手稻溪仁会病院、同3月に西円山敬樹園、カームヒル西円山と、3病院3施設が次々と審査登録を受けた。03年には溪仁会グループ統括本部も審査登録を受けた。複数法人の本部組織が単独で審査登録を受けたのは、全国的にもめずらしいことだった。

この頃、急性期病院である手稻溪仁会病院はドクターヘリ事業にも積極的に取り組んでいた。背景には地域への貢献という思いがあった。石狩や後志といった地域からやってくる患者さまも少なくないのに、救急時の対応に限界があるというジレンマ。正式運航となるまでに、自主的な試験運航は300回を超えた。

2000
平成12年

- ◎介護保険法施行
- ◎抑制廃止運営基準実施
- 北海道抑制廃止研究会が活動開始（会長は定山渓病院中川翼院長）
- 円山渓仁会デイサービスセンター開設（1月）
- 気仙沼市在宅介護支援センターおおしま委託業務開始（2月）
- コミュニティホーム美唄開設（4月）
- 居宅介護支援事業所が事業開始（西円山敬樹園、コミュニティホーム白石、やくも、すまいる）（4月）
- 手稻溪仁会クリニック開院（5月）
- 西円山病院NSTチーム立ち上げ（6月）

2001
平成13年

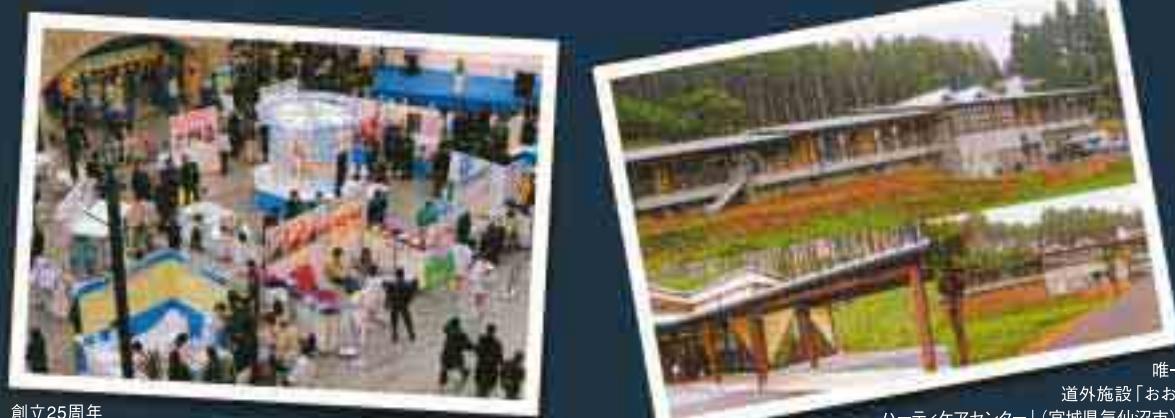
- デイサービスセンターおおしま開設（9月）
- グループホーム白石の郷開設（10月）
- 身体拘束ゼロ作戦推進会議を発足（会長は定山渓病院中川翼院長）（10月）
- デイサービスセンター白石の郷開設（11月）
- ◎第四次改正医療法施行（病床区分見直し、卒後研修必修化、医療情報提供推進）
- ホームページで情報提供開始（10月）

2002
平成14年

- 円山クリニックが溪仁会円山クリニックに名称変更（4月）
- ドクターヘリの試験運航開始（8月）

2003
平成15年

- 手稻溪仁会病院に隣接する保育園で病児保育開始（札幌市内では3カ所目）
- グループホーム西円山の丘開設（7月）
- 手稻溪仁会デイサービス開設（4月）
- 豊平溪仁会デイサービスおよび新琴似溪仁会デイサービス開設（8月）
- 溪仁会訪問リハビリテーションセンター開設（4月）
- 訪問看護ステーションあおば開設（4月）
- 青葉ハーティケアセンター開設（4月）



創立25周年

記念の来場者参加型健康イベント。
テーマは「心を支える、暮らしを支える、
私たちの地域医療」。直木賞作家の
五木寛之さんを招き、心の健康をテー
マとした講演会も開催。

唯一の
道外施設「おおしま
ハーティケアセンター」(宮城県気仙沼市)が、
2005年8月リニューアルオープン。県内初の高齢
者小規模多機能施設として在宅介護にかかる
多様なサービスを複合的に提供。

医療機関におけるボラ
ンティアの草分け的存在
、「銀の舟」発足20
周年記念式典。1985
年の発足当時は25
人、この時は登録会
員152人を数える道
内最大の病院ボ
ランティア組織に
発展。

医療と福祉の変革期。 新しい渓仁会グループの始まり。

2005年4月から本格運航となったドクターヘリ。
事業スタートにあたって3月31日に記念式典を開
催しテープカット。北海道厚生局長、北海道知事、
医師会会长ら多数の関係者が出席した。



[2004年～2005年]

変革

社会に存在する意義を強く認識しながら 社会・経済・環境を見据えた「第二の創業」

2000年代の初め、バブル崩壊の余波が渓仁会グループを襲った。平成不況を代表する大手金融、日本長期信用銀行の経営破綻による連鎖反応。このことは渓仁会グループにも少なからず影響を与えた。01年からの数年はその立て直しの時期でもあった。そして04年、渓仁会グループに新理事長が就任する。札幌医科大学の前学長・秋野豊明である。

25年前、西円山病院という一老人病院から始まった渓仁会グループは、いまや北海道を代表する大規模医療機関に成長していた。秋野理事長は経営の立て直しにあたり、それまでのオーナー経営から企業体の組織経営へと、経営手法を転換。

渓仁会グループがこれまで歩んできた25年にわたる軌跡をさらに確かなものにするため、すべての職員が自らの使命を自覚し、共有する取り組みを開始した。「安心感と満足の提供」、「信頼の確立」、「プロフェッショナルマインドの追求」、「変革の精神」。この4つの理念を職員一人ひとりが継承し、保健・医療・福祉の向上に貢献していくのだという方向を示した。

渓仁会グループの第二の創業がこうして始まった。

時はまさに医療制度改革の真っただ中だった。社会の高齢化はさらに進み、国民医療費の抑制に向けた医療制度改革が進められていた。渓仁会グループは、制度改革による環境の変化を敏感に受けとめ、ビジョンを明確にし、将来の展望を見据えながら前に進み続けることを決意した。変革の時期だからこそ、常に変革の精神を忘れず、改革し続けることを誓い合った。

2004
平成16年

- 新理事長に秋野豊明就任(4月)
- コンプライアンスマニュアル(法令・倫理遵守)
の全職員配布を実施
- 渓仁会グループが環境マネジメントシステム
(ISO14001)審査登録
- 西円山病院・定山渓病院でミックスペーパー^{リサイクル}(廃棄していたコピー用紙等を古紙
原料に再生させる取り組み)開始
- 西円山病院経営管理部内に「西円山病院
接遇委員会」設置(4月)
- 個人情報保護への取組開始(7月)
- コミュニティホーム白石ショートステイセンター
開設(9月)

2005
平成17年

- 西円山病院・定山渓病院にて中学生のボラ
ンティア活動を実施
- ◎**医療制度改革大綱決定**
- (株)ハーティワークス設立(1月)
- 創立25周年記念イベント「健康フォーラム」
開催(3月26、27日)
- 手稻渓仁会病院新型救命救急センターとし
て正式認可(3月)
- 手稻渓仁会病院救命救急センターを基地病
院として「北海道ドクターヘリ」の正式運航が
開始(4月)
- ヘルパーステーションあおば事業開始(4月)
- 手稻渓仁会病院が(財)日本医療機能評価
機構による認証取得(9月)
- 在宅ケア事業本部設置
(07年4月在宅ケア事業部に名称変更)
- 訪問看護ステーションさくら開設(7月)
- おおしまハーティケアセンターリニューアルオ
ープン(8月)
- 西円山病院ボランティア「銀の舟」発足20
周年記念式典(11月)
- 渓仁会グループ広報誌「サラネット」が全国
ヘルスケア情報誌コンクールで優秀賞受賞
(2008年にはグランプリ受賞)



さらなる未来へ。 使命を果たして社会に貢献する。



心豊かな毎日のために、各病院や施設では一年を通じてさまざまに趣向を凝らした催事を行っている。写真は2006年から開催している西円山病院月例ロビーコンサート。



2008年よりおたるドリームビーチ清掃活動を開始。2009年6月には済仁会グループ各施設の職員とその家族161名と、ボランティア学生38名が参加。

宣

[2006年～future]

医療機関では国内初「CSRレポート」発行 社会的責任を果たす誠実な組織風土づくり

済仁会グループは、「医療・福祉分野は日々の業務そのものが社会的責任(CSR)である」という認識に立っている。2006年にはCSR経営を宣言し、めざす理念や活動の方向性、内容を広く内外に公開する「CSRレポート」の発行を開始した。

現在、多くの企業が「社会的責任経営は企業の責務である」としてCSRレポートを発行するようになっているが、保健・医療・福祉の分野では済仁会グループが国内初の試みだった。このことは医療界のみならず、産業界など広く各界から注目を浴びることとなった。

高齢社会が著しく進展するなか、医療・福祉サービスを担う

ことは重要な社会機能である。社会からの要請に誠実に応えていくことこそがCSRの本質であり、その基本は患者さま、利用者さま、ご家族の皆さま、地域や取引先などの関係の皆さまとの“信頼関係の確立”であると、済仁会グループは考えている。

09年、済仁会グループは創業30周年の節目を迎えた。30年の歴史を経て、現在では4法人、約60の事業所を擁し、職員数約3600名の、北海道における最大の保健・医療・福祉グループとなった。現代の社会システムが「官から民へ」の流れを強めるなか、済仁会グループは公益性を担う民間事業体として認識され、北海道の地域医療や地域福祉への期待感も大きくなっている。済仁会グループの各病院、施設、事業所は、その大きな役割を担い、それぞれが持つ特徴を活かして、社会のニーズに応えるさまざまな取り組みを今日も続けている。

2006 平成18年

◎改正介護保険法施行

- 済仁会グループCSRレポート発刊開始
- 社会福祉法人南静会プライバシーマーク取得
- 保健事業部設置(1月)、市内5カ所で介護予防センター事業開始(4月)、白石区第1地域包括支援センター事業開始(4月)

2007 平成19年

◎第五次改正医療法施行

- 手稲済仁会病院救命救急センター棟オープン
- プライバシーマーク取得(医療法人済仁会・(株)ソーシャル・(株)ハーティワーカーズ)
- 西円山病院院内保育所「西円山ピッコロ保育園」新築
- 西円山病院の献血運動(92年から実施)が

2008 平成20年

日本赤十字社の献血功労表彰

- 西円山病院が病院機能評価認定
- 済仁会琴似訪問看護ステーション・ケアセンターこころ・コミュニティホーム岩内開設(4月)
- 地域密着型介護老人福祉施設菊水こまちの郷、小規模多機能型居宅介護菊水こまちの郷開設(7月)
- 医学教育に関する専門的な技術を病院内で習得できるプログラム「手稲→ハワイ医学教育フェローシップ」を導入

◎後期高齢者医療制度スタート

- 医療機能強化型老健施設の創設
- 手稲済仁会病院小児NIVセンター開設(4月)

2009 平成21年

●西円山病院で初の「看護師就業サポート研修会」開催

- 手稲済仁会病院が北海道洞爺湖サミットの救急医療基幹病院に指定
- グループ職員によるおたるドリームビーチ清掃活動、リングブル收集活動開始
- 岩内町地域包括支援センター事業開始(4月)
- 居宅介護支援事業所ケアプランセンターこころ事業開始(4月)

●社会福祉法人南静会が社会福祉法人済仁会に改称(4月)

- 手稲家庭医療クリニック開院(10月)
- 済仁会健康保険組合設立(10月)
- 西円山病院が札幌西円山病院に改称(11月)

誠実な組織のもとで最良のサービスを。

わたしたち渓仁会グループは、1979年の創業以来、地域の皆さまの「保健・医療・福祉」をサポートしてまいりました。

現在は札幌市を中心に、医療法人、社会福祉法人、福祉サービス会社など4法人を運営し、

「保健・医療・福祉」を相互に連携させながら、今求められる最良のサービスを提供しています。

渓仁会グループの輪 (2009年11月1日現在)

[保健]

健康のチェックと病気の早期発見、健康管理、予防に関するサービスを提供しています。

- 総合健診施設 渓仁会円山クリニック



保健

[治療とケア]

最新医療技術と機器を備え、365日24時間の救急受け入れ体制で総合医療を提供しています。

手稲渓仁会 医療センター

- 総合医療 手稲渓仁会病院
- 手稲渓仁会クリニック
- 手稲家庭医療クリニック



治療とケア

大きな安心

[介護・社会復帰・生活支援]

住み慣れた家庭や地域で生活できるよう、介護・福祉のサービスを提供しています。

- 介護老人福祉施設 西円山敬樹園
- 地域密着型介護老人福祉施設 菊水こまちの郷
- 介護老人保健施設 コミュニティホーム白石
- 介護老人保健施設 コミュニティホーム八雲
- 介護老人保健施設 コミュニティホーム美唄
- 介護老人保健施設 コミュニティホーム岩内

- 軽費老人ホーム カームヒル西円山
- グループホーム白石の郷
- グループホーム西円山の丘
- 西円山敬樹園ショートステイセンター
- おおしまショートステイセンター
- コミュニティホーム白石ショートステイセンター

介護
社会復帰
生活支援



[療養とケア]

長期療養が必要な方に、看護・介護・リハビリテーションを中心とした医療サービスを提供しています。

- 療養病床 札幌西円山病院
- 療養病床 定山渓病院



[福祉用具]

福祉用具の貸与・販売、施設関連の備品の相談に応じます。ご家族で介護を必要とされる方が快適な生活を過ごせるようサポートしています。

- 株式会社ハーティワークス

[介護予防・在宅支援・生活支援]

すべての高齢者を対象に自立した日常生活を支援。病気や障害等で介護が必要になった時、専門のスタッフが日常生活をサポートしています。

- 札幌市白石区第1地域包括支援センター
- 岩内町地域包括支援センター
- 宮城県気仙沼市
在宅介護支援センターおおしま
- 札幌市中央区介護予防センター円山
- 札幌市中央区介護予防センター曙・幌西
- 札幌市白石区介護予防センター白石中央
- 札幌市南区介護予防センター定山渓

- 札幌市手稲区介護予防センターまえだ
- 手稲渓仁会デイサービス
- 新琴似渓仁会デイサービス
- 円山渓仁会デイサービス
- 豊平渓仁会デイサービス
- 西円山敬樹園デイサービスセンター
- デイサービスセンター白石の郷
- あおばデイサービスセンター
- デイサービスセンターすまいる
- デイサービスセンターおおしま
- 小規模多機能型居宅介護 菊水こまちの郷
- 清仁会在宅ケアセンター
- 西円山病院在宅ケアセンター
- 定山渓病院在宅ケアセンター
- 指定居宅介護支援事業所
　　コミュニケーションホーム白石
- 指定居宅介護支援事業所
　　西円山敬樹園
- 指定居宅介護支援事業所
　　あおば
- 指定居宅介護支援事業所すまいる
- 指定居宅介護支援事業所やくも
- おおしまハーティケアセンター
- 指定居宅介護支援事業所
　　ケアプランセンターこころ
- はななす訪問看護ステーション
- 訪問看護ステーション本郷
- 訪問看護ステーションあおば
- 訪問看護ステーションおおしま
- 西円山敬樹園
　　ホームヘルパーステーション
- コミュニティホーム白石
　　ホームヘルパーステーション
- ホームヘルパーステーションすまいる
- ホームヘルパーステーションおおしま
- ケアセンターこころ
- ソーシャルヘルパーサービス白石
- ソーシャルヘルパーサービス中央
- ソーシャルヘルパーサービス西

この「道」をひらく。

そこに在る
プロフェッショナル
マインド

溪仁会グループを形作っているもの、動かしているもの。
それは医療人としてのスキルとハートをもった“プロフェッショナル”。
彼らはいま、何を思い、どこへ向かっているのか。
変革の精神でそれぞれの道をひらく、職員たちの物語を紹介します。

家庭医を育てるという新しいビジョン。 日本の医療を救う挑戦が始まる。

家庭医、と聞いてピンと来る人はまだ少ない。症状や治療法、年齢や性別に限らず、あらゆる初期診療を受け持つのが家庭医だ。欧米では家庭医療専門のトレーニングを積んだ医師が定着しているが、日本でも医師不足を解消する存在として、最近注目されている。この家庭医の育成拠点にもなる「手稲家庭医療クリニック」が、今秋手稲区に誕生した。

手稲渓仁会病院の臨床研修部では、2008年に家庭医療コースを新設。指導医として家庭医の育成を担当するのが、米国家庭医療学専門医の資格を持つ小嶋一医師だ。

「最初から家庭医をめざしたわけではなく、研修医時代に経験した離島での医療が転機になりました。小さな島で住民一人ひとりの暮らしと深く接するうち、地域に根ざした医療の魅力を知った。家庭医療の先進地であるアメリカで専門教育を受けた小嶋医師は、やがて日本での家庭医育成をめざすようになる。

帰国した小嶋医師が、同じビジョンを持つ星哲哉医師とともに根を降ろしたのが、手稲渓仁会病院だった。「日本全国から誘いがありました。北海道は複合的な要素を持つ地域であること、また手稲渓仁会病院が研修医育成に熱心なこと、地域医療連携など新しいことにチャレンジする組織風土があることに可能性を感じ、ここで家庭医育成に取り組もうと決めました」

札幌市で初となる家庭医療クリニックは、1階に外来診療室と訪問看護ステーション、2階に終末癌患者のための病棟が設けられている。外来診療は内科のほか、小児科と産婦人科も対象にしている。また、在宅医療にもウエイブを置き、家族での療養を望む患者とその家族を支える機能を担う。ここで研修医たちは命の現場を肌で知ることになる。「生命の誕生から最期の瞬間までを受け持つのが家庭医。ここは“看取りを”取り入れた、人の一生にふれることができる施設なのです」。小嶋医師は、全国的に珍しい意欲的な試み、と話す。

新施設の愛称は、アイヌ語で桜を意味する「かりんば」。地方医療に貢献する家庭医育成という夢が花開こうとしている。

手稲渓仁会病院
手稲家庭医療クリニック 院長
小嶋 一
KOJIMA HAJIME



この道をひらく。

そこに在る
プロフェッショナル
マインド

30年
のあゆみ

組織
一覧

この道をひらく

わたしたちのCSR

ステークホルダーとの対話

環境報告

トップメッセージ

研修医の朝は早い。午前6時過ぎに病院へ向かい、カルテチェックやベッドサイドでの診察を済ませると、毎朝行われる症例検討会に出席。その後は、診察やカンファレンス、治療方針の説明や勉強会などが夜まで続く。

手稲渓仁会病院の臨床研修部は、充実した教育内容や指導体制が人気を呼び、研修を希望する医学生が全国から集まつてくる。高い倍率をクリアし、2008年からトレーニングを受けているのが高橋利佳研修医だ。

医師をめざしたのは、人を手助けしたい、という漠然とした思いからだった。やがてマザーテレサの活動に感化され、医療過疎地での貢献を志すようになる。「医療の不足している場所があるなら、そこで私も身を捧げたい」と考えるようになりました」

研修先に手稲渓仁会病院を希望したのは、先進的とされる北米方式の3年制研修システムや、1年次から3年次までが一体となって研修を進め屋根瓦式教育などに魅力を感じたためだが、

決め手となったのは家庭医療コースが新設されたことだった。「将来のロールモデルとなる先生がいました。アメリカでトレーニングを積んだ先生から、マンツーマン指導を受けられることに惹かされました」

地域に根ざす家庭医が理想ではあったが、進路に迷いがなかったわけではない。最初から家庭医をめざすべきか、それとも専門医としての経験を経るべきか。悩んだ末、初志貫徹することを選んだ。「ちょうど家庭医療コースが新設されたのも必然だったのだろうと。家庭医はまだ日本では浸透していませんが、これからはこうした流れも増えるはず。道無き道を進むのは不安な反面、楽しみもあります」と、たくましい一面を見せる。

臨床では思わぬ失敗や苦労もあるが、回復した患者さんの明るい笑顔に励まされる。そこにあるのは「とことん人が好き」という前向きな情熱だ。ひたむきに前進する姿には、地域医療の未来を担う力が秘められている。

地域から信頼される家庭医をめざして。
臨床での経験一つ一つが、私を成長させる。

手稲渓仁会病院 臨床研修部

高橋 利佳

TAKAHASHI RIKA



数少ないフライトナースとして命の現場に臨む。 求められるのは一瞬の判断力と相手を思う心。

一刻一秒を争う救命救急の世界では、迅速な処置が命を左右する。しかし北海道のような広大なエリアでは搬送時間が長くなることも多い。これを解決する一策としてドクターヘリの導入が進められている。ヘリには医師とフライトナースと呼ばれる看護師が同乗し、現場や機内で速やかに処置にあたる。病院搬送前の救命処置にかかるため、フライトナースは救命救急での豊富な経験と柔軟な対応力が求められる、いわば救急看護の第一人者だ。

手稲済仁会病院では2002年からドクターヘリの研究運航を重ね、2005年に正式運航を開始。鈴木裕子看護師は2004年からフライトナースとして活動してきた。人気の高い専門職だが、「救命救急に長くかかわっていましたが、やりがいや達成感があり、とても充実していました。そのためフライトナースに欠員が出たときも、あえてなりたいとは思いませんでした」。周囲のすすめを一度は断ったが、救命救急の延長線上にあるものなら経験すべきではないか、と思い直した。

フライトナースは、患者へのケア、家族とのコミュニケーション、救急隊や消防隊、搬送先の病院や医師らとの連携を一人で行う。出動要請があればすぐに飛び出せるように、物品管理も欠かせない。「自分はどう動くべきか」。悩んだりもした。そのときに支えとなったのが、「看護の質を落としてはならない」という強い意思だった。自主的な勉強以外にもフライトナース会で情報共有を図り、スキルアップをめざした。また航空医療学会にも参加し、多くのことを吸収してきた。

今年から、旭川市と釧路市でもドクターヘリの運航が開始された。「北海道のフライトナースの質を高めるためにも、連携してノウハウを伝えたい」。フライトナースを志す後輩たちも多い。自分がチャンスをもらったのと同じように、そして次の人才培养のためにも、世代交代が必要だと思っている。そのときまでは、命の現場に情熱を注ぐ日々が続く。

手稲済仁会病院 看護部 救命救急センター

鈴木 裕子
SUZUKI HIROKO



この**道**を ひらく。

そこに在る
プロフェッショナル
マインド



**「明日はきっと変えられる」という信念。
仲間とともに、時代に応える看護を創造する。**

医療法人済仁会法人本部 看護統括部長
手稲済仁会病院 看護部部長

樋口 春美
HIGUCHI HARUMI

小柄な体に柔軟な語り口。2009年4月から医療法人済仁会の看護部門を統括する樋口春美看護統括部長は、そのやさしい物腰からは想像できないほど、強い信念と行動力を持つ。

入職は手稲済仁会病院が開院した翌年のこと。それまでの他院でのキャリアから、リーダーとしての役割を期待されての採用だった。「その頃はまだ院内体制が確立されておらず、一つ一つ手探りでつくりあげていきました」と振り返る。苦労はあったが、スタッフの誰もが新しい病院づくりに夢を持っていた。「明日はきっと変えられる」。そんな思いを共有しながら、目標に向かって誠実に努力を続けた。そうした院内風土は、今も変わらずに引き継がれているという。

その後、西円山病院に異動となり、高齢者看護について一から学んだことで「急性期でも慢性期でも、管理の本質は変わらない」と気づいた。そして「看護と管理について深く学びたい」という思いが強くなり、大学院に進学。2006年に認定看護管理者資格を取得した。「チャレンジャー

でありたい」と話す通り、自らに課したスキルアップへの挑戦だった。

看護統括部長という重責も、看護の知識や技術面だけでなく、人をつなぐ役割も果たせるなら、と引き受けたが気負いはない。仲間たちと力を合わせながら、新たな目標に取り組んできた。その一つが、専門的なスキルを交換し、互いに学び合うことを目的に始まった、手稲済仁会病院と西円山病院の認定看護師の人材交流だ。「人がもっと動けるような環境にしたい。道が太くなれば、組織全体の活性化や、サービス向上にもつながるはずです」

看護現場の荒波を乗り切る支えとなっているもの。それは「まだできることがある」というプラス思考だ。どんな難題でも必ず光が見えてくる、と信じている。「たくましく柔軟に優しさをもって、社会のニーズに応える看護が目標。時代の変化をチャンスにして、看護師としてできることを切りひらいていきたいですね」

この道**を
ひらく。**

そこに在る
プロフェッショナル
マインド

この道をひらく。

そこに在る
プロフェッショナル
マインド



手稲渓仁会病院の薬剤部は、全病棟への専任薬剤師の配置や、注射薬の無菌混合など、幅広い活動を展開しているのが特徴だ。副部長を務める矢萩秀人薬剤師は、19年前に入職。現在は、薬品管理、製剤、注射薬調剤の3セクションをまとめながら、後輩の指導や注射薬の混注業務にあたっている。

開院時からのコンセプトは、「薬が使われる現場やその流通過程には、必ず薬剤師がかかわる」ことだ。これによって、薬剤師は積極的に臨床現場にも携わり、活動のフィールドを広げてきた。「医療事故を防ぐための安全管理システムにも、最初から薬剤師の存在が組み込まれていました。現在では限りなくミスを防ぐ体制が構築されています」

通常、注射薬の混注は、看護師が医師の指示を受けて行うが、忙しい看護業務の中での作業にはリスクが伴なう。それを薬剤師が行うことで、安全かつ確実に注射薬を提供しよう、というのが手稲渓仁会病院の考え方だ。1998年には、薬剤部門を1フロアに集約し、混注業務専用の広いクリーンルームを設けたことで、機能はさらに強化された。

「精度を高めて信頼を得る。実績を積み重ねて、



自分たちの存在をアピールする。そのための努力は、誰も惜しません」。すべての薬剤業務に対する責任を持つため、50名ほどのスタッフが、交替で当直や休日勤務もこなす。「みんなには苦労をかけている」と思うが、業務の拡張とマンパワーへの負担は表裏一体だ。そのことを薬剤部全体が理解し、それぞれが高い目的を持って業務に臨んでいる。

課題もある。例えば、外来患者への化学療法についても、モニタリングやバイタルサインのチェックなどを薬剤師が行う体制にしたいが、マンパワーが足りない。また自分自身も、新たな資格取得に挑戦すべきだが、今の業務を極めたいという思いもある。「現場にしがみついてしまっている」と締めくくった笑顔に、仕事への深い愛情と誇りがにじんだ。

**薬剤が使われる現場にはすべて携わるという理念。
リスクを最小限にとどめるための努力が続く。**

手稲渓仁会病院 薬剤部副部長

矢萩秀人
YAHAGI HIDETO



この道をひらく。

そこにある
プロフェッショナル
マインド

30年
のあゆみ

組織
一覧

この道をひらく

わたしたちのCSR

ステークホルダーとの対話

環境報告

トップページ

急性期医療では、より正確でスピーディな検査データの提供が必要とされる。手稲渓仁会病院は、高度な生理検査や病理検査、細菌検査など、充実した臨床検査部門を擁し、また道内3番目の血液製剤取扱量を誇る輸血検査や検体検査を24時間体制で実施。さらに、最先端医療にかかる研究も重視するなど、専門医療と連動した検査体制を築いている。

臨床検査部のリーダーである男澤千啓部長は、手稲渓仁会病院が開院して2年後の1989年に入職した。それまで培ってきた、細菌検査分野での経験を買われてのことだった。「当時の日本は、アメリカなどに比べ、院内感染対策が立ち遅れています。手稲渓仁会病院は、かなり早い段階でこの問題に取り組み始め、私は対策チームの一員として感染ルート撲滅に向けた活動に乗り出しました」

その頃は、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌(MRSA)などが徐々に出現し始める一方、結核患者が減少していた時代でもあり、職員の院内感染への関心も低かった。職員一人ひとりの自覚を促すため、啓発活動も重要なテーマとなった。

「大切なのは継続すること。例えば、病院環境の見直しなど、各スタッフが身近で負担なく、毎日できることを提倡しました」。地道な努力が結実し、現在は感染制御チーム(ICT)と看護チームとの連携した対策システムが確立されている。

高精度な検査体制を守るために、若手の育成にも熱心に取り組む。経験の浅い技師たちは、積極的に道内・市内での学会や講演会に参加させ、見識を積ませている。また、3年目以降になると道外での学会などに参加させ、全国・世界レベルでのスキルアップをめざす。自分たちの検査技術がどのレベルにあるのかを、より広い観点から認識してもらうためだ。

自身は、専門領域である細菌分野の研究に力を注ぐ。免疫療法に使われる細胞の培養や自己血液成分アフェレシスと臨床応用の推進など、他の医療機関を一步リードする。「この病院には、やりたいことを実現させてくれる環境がある。スタッフもそれに応えようという意識が高い」。うちの検査部はかなりイケてる、という言葉がチームとしての結束力の強さを物語っていた。

細菌検査分野におけるプロフェッショナリズムで院内感染の撲滅と最先端医療への貢献をめざす。

手稲渓仁会病院 臨床検査部部長
男澤 千啓
OTOKOZAWA CHIHARU



この道をひらく。

そこに在る
プロフェッショナル
マインド

30年のあゆみ

組織一覧

この道をひらく

わたしたちのCSR

ステークホルダーとの対話

環境報告

トップメッセージ

2006年に設けられた札幌西円山病院訪問リハビリテーション科には、現在2名の言語聴覚士が勤務している。摂食嚥下障害、失語症など、退院後の生活に問題を抱える在宅患者のため、皆上寛子言語聴覚士は日々車を走らせる。

人と接し、人に役立つ仕事をしたい。その思いから医療の世界に興味を持ち、中でもコミュニケーションと食事という生活に欠かせない機能を支える言語聴覚士に魅力を感じた。札幌西円山病院に入職し、約3年間の病棟業務を経て、2007年から訪問リハビリテーション科へ異動した。

業務は病棟勤務の頃と変わり、戸惑いはあった。入院のリハビリでは在宅復帰が目標でも、治療が優先される。一方、訪問リハビリは利用者の生活が中心であり、その中に治療やリハビリが

入っていく。それぞれの生活スタイルや考えを持つ。信頼関係が何よりも重要ということに気付いた。「正しいこと、専門的なことでも、伝え方を考えないと受け入れてもらえません。一方的にご家族のやっていることを否定してしまうことは、信頼関係をつくる上であり良いことではありません」

だから、とにかくご利用者、ご家族と話をして、どこにフォローが必要なのかを見極める。「患者さんやご家族に心地いいと感じてもらえるように、明るい雰囲気作りを心掛けます。ご家族と問題点を共有できた時が、指導内容を説明するチャンスです」。訪問時間の中で相談されたことは、結論を出せず持ち帰ることはあっても、必ず何らかの方針を示し、話をまとめる力が必要となる。「専門性だけでなく、人間力を期待されています」

訪問リハビリテーションを担当する言語聴覚士の存在は、広く認知されているとは言い難い。「退院時にすぐ引き継げるのが理想なのですが、まだそういうケースは少ないですね。どうして、もっと早く力になれなかつたのだろうと思うこともあります」。地域のケアマネジャーとの連携も含め、もっと頼られる存在にならなければ力が入る。

居住空間に訪問してのリハビリは、専門性に加えて“人間力”を試される。

札幌西円山病院 訪問リハビリテーション科 言語聴覚士

皆上 寛子

MINAKAMI HIROKO



札幌西円山病院では2004年から病棟への介護福祉士の本格的配置を始めた。療養病棟に入院する患者さんたちのQOLを上昇させるためには、福祉のエキスパートである介護福祉士が、ケアプランの作成から関わることを期待されている。

現場を支える若手のひとり、浜崎志野介護福祉士がこの仕事を選んだ理由は「おじいちゃん・おばあちゃん子だったので」。高齢者とふれあい、生活の手助けをしたいと思っていたが、福祉施設での実習を経験するうちに、さまざまな医療職種との連携のもと、患者さんの治療とケアを行う病棟勤務に強い魅力を感じた。

患者さんの生活に寄り添う立場から、質の高いケアの実現を後押しする。

札幌西円山病院 3B病棟 介護福祉士

浜崎 志野

HAMAZAKI SHINO



看護師やリハスタッフと共に業務に臨むと、医療の知識の必要性を感じさせられることは多い。処置を見る機会も多く、毎日が勉強だと感じる。しかし同時に、生活を援助する介護スタッフならではの見守り、目配りの視点がなくてはならないことも感じている。「患者さんの朝から晩までの行動や状態を把握できるので、限られた時間の中での関わりになるリハスタッフさんなど、他の職種の方に伝えられることは多いんです」。看護師やリハスタッフとは、申し送りだけでなく日常的に気付いたことをすぐ話し合うようにしている。

とはいっても、介護の現場の深刻な人手不足は、病棟も例外ではない。業務に追われ一人ひとりの患者さんとの関わりを満足いくまで持てず、少ない人数で夜勤を行うことを重圧に感じることもある。もっとも辛いのは、患者さんの死に立ち会うことだ。「絶対に慣れたりしないぞと思います」

だが、そういう時には介護という仕事が持つ喜びが支えてくれる。「患者さんが私に心を開いて“志野ちゃん”と名前で呼んでくれるときが一番嬉しいですね。お礼を言われるよりも、自分の存在をきちんと覚えてくれたんだということが」。限られた時間でも、患者さんに毎日できるだけ思い出深く過ごしてもらえるよう、笑顔を絶やさず仕事をすることが彼女の信念だ。

この道を
ひらく。

ここに在る
プロフェッショナル
マインド

白石区の住宅街にある「菊水こまちの郷」は、入居定員29名の地域密着型介護老人福祉施設と、通所中心の小規模多機能型居宅介護が併設された、新しいタイプの特別養護老人ホームだ。2007年の開所以来、家庭的な雰囲気と細かなケアが人気を集めている。

「おはようございます」と明るい声で、挨拶して回る女性がいる。小泉静江介護主任は、ケアワーカーたちをまとめながら、自らも現場に立つ。温かな笑顔に、さりげない気づかい。20年以上にわたる介護職員としてのキャリアに裏打ちされた包容力を感じさせる。

福祉の世界に入ったのは、軽い気持ちからだった。「20代後半で接客業を辞めた後、西円山敬樹園に勤めていた知り合いからアルバイトに誘われ、短期間なら、と気軽に引き受けました。介護の経験はゼロ。先輩職員に介助方法を一から教えてもらいました」。初めて経験することばかりだったが辛いとは思わず、人と接する仕事が楽しかった。



**お年寄りとのかかわりで見つけた喜びが原動力に。
「心」でケアすることのすばらしさを伝えたい。**

社会福祉法人渓仁会 菊水こまちの郷介護主任

小泉 静江
KOIZUMI SHIZUE

その後コミュニティホーム白石の開所にあわせて異動し、それから18年間、介護老人保健施設で働くことになる。その頃はまだ経験が浅く、仕事は日々の業務を重ねながら学んでいった。忙しかったが、利用者さんの笑顔や家族とのかかわりに小さな喜びを見つけることができた。「それができたのは、私がこの仕事に向いていたからなのかもしれません」。後輩を指導する立場になったこともあり、7年前には介護福祉士の国家資格を取得した。明確な根拠に基づく介護の必要性を感じたためだった。

「菊水こまちの郷」は小規模のため、利用者とじっくりかかわるのが魅力だ。今は少数のスタッフと心のこもったケアをめざす。小さい施設だからできるサービスがある、と考えている。「この施設は“終の棲家”。長い人生を生きてきた方それぞれの思いを大切にしながら、家族のように見守っていけたら。そのことを、若いスタッフたちにも伝えていくのが、私の役目だと思っています」

この道をひらく。

そこに在る
プロフェッショナル
マインド

この道をひらく。

そこに在る
プロフェッショナル
マインド

栄養の知識は、病気を予防するためにある。
信念のもと、生活支援から北海道民の健康増進を目指す。

医療費の高騰を受け、“予防医学”が重要な課題となった。渓仁会円山クリニックは健診という検査・診断を行う一方、生活習慣改善のための栄養相談をしている。その数は年間2,000件に及ぶ。さらに2008年には特定健診・特定保健指導が導入され、管理栄養士の役割は増すばかりだ。

栄養指導科の佐藤きぬ子主任は、早くから予防の重要性を訴えてきた一人だ。手稲渓仁会病院の立ち上げから12年間勤めた。

だが、入院中は栄養指導に従っても、退院後まで続かず、また健康を損ねて病院に戻ってしまう人がいる。「病気になってからの栄養指導でいいのか」。その疑問が佐藤主任を、栄養士の業務拡大をめざす渓仁会円山クリニックへと動かした。

予防としての栄養相談に携わって気付いたのが、「病んでいない人は“指導”を求めてはいない」ということだった。クリニックの栄養相談に来る人は健康への意識が高いが、特定保健指導に来る人の中には、“嫌々来る”という人もいる。だから、気付きを促し、自分で解決する力を養うことが目的となる。決められた時間の中で伝える

ためには、カウンセリングやコーチングといった、伝える側の技術向上も求められる。「短い時間で結果を出そうとはせず、生活を振り返り、これがよくない状態であることを気付き、自ら改善しようと思っていただく。それが特定保健指導だと思う。指導ではなく、支援ですね」

クリニックを訪れる人だけでなく、自治体などの求めに応じ、管理栄養士がいない地方の指導のために全道を駆けめぐる。多忙な毎日が続くが、「継続しないと信頼関係が築けませんから。くりかえすことが大切です」と平然と言い放つ。健診で異常な数値が出て、治療が必要かどうかの瀬戸際にいる人を、生活支援・健康増進活動によって、要治療になるのをできるだけ防いでいくのが、渓仁会円山クリニックの求められる姿だと佐藤主任は信じている。「さらに外来からも積極的に予防を進めてほしい。そのためクリニックの専門外来がもっと機能して欲しい。できるだけサポートしていきたい、そういう思いで一杯です」。一歩ずつであるが、確かな歩みが、地域全体の健康を守ることに繋がっていく。



渓仁会円山クリニック
保健事業部 栄養指導科主任
佐藤 きぬ子
SATO KINUOKO

この道をひらく。

そこに在る
プロフェッショナル
マインド

渓仁会グループの最初の医療機関として、西円山病院が誕生したのが1979年。それから30年間にわたり、事務スタッフとして病院の運営に尽力してきた人物がいる。現在、手稲渓仁会病院の経営管理部を統括する堀公明部長は、組織の草創期から今までの歴史を知る、渓仁会グループでも数少ない職員だ。

西円山病院では、立ち上げの準備からかかり、8年間で3度の増築・増床を経験した。ベッド数は146床から947床にまで増え、まさに「事業の拡大期」に立ち会った。

高齢者慢性期医療の次に渓仁会グループがめざしたのは、高度な急性期医療だった。手稲渓仁会病院の開設準備室に異動となったことで、まったく機能が異なる急性期病院について一から学ぶことになる。どういう病院が評価され、医療が求められているのか。当時、医療の質の向上や経営改善に積極的だった民間病院を手本に、自分たちが理想とする病院像を思い描いた。「始

めから500床を持つ総合病院というのは稀で、周囲からは“無謀な実験”と言われました」と振り返るように、確かにしばらくは経営的に困難な時代が続いた。しかし、「いつか社会から評価される病院になる」という確信があったという。

巨大な病院の立ち上げにかかわり、その成長とともに歩み続けてきたが、「経営管理の責任者としては失格かもしれない」と笑う。「採算を最優先するのではなく、まず病院としてやりたいことが先にあり、次にそれを実現するための人材やインフラについて考えます。採算を考えるのは最後。それを許してくれた渓仁会という組織にとても感謝しています」。その言葉を裏付けるように、どのスタッフも「この病院にはやりたいことを実現させてくれる風土がある」と口を揃える。

将来は、手稲渓仁会病院を日本の急性期医療をリードする存在に、という大きな夢がある。そしてこの病院にはそれを実現するだけの可能性が必ずある、と信じている。

渓仁会の歴史とともに歩み続けた30年間。
ゴールなき道の先に、日本をリードする医療がある。

手稲渓仁会病院 経営管理部部長
堀 公明
HORI KIMIAKI



札幌の奥座敷と呼ばれる定山渓地区。温泉街の一角にたつ定山渓病院の職員たちにとって、重要な足となっているのが送迎バスだ。サプライサービス課に所属する加藤克廣運転士は、この道26年の大ベテラン。しかもその間、無事故無違反という、まさに運転士の鏡ともいえるキャリアを誇る。

加藤運転士が定山渓病院に入職したのが1984年。もともとは東北地方でトラックや重機のドライバーをしていたが、趣味のフライフィッシングの本場である北海道への憧れから、北の大地で働くことを志した。畑違いの分野からの転職だったが「違和感なく、スッと雰囲気になじみました。人とかかわることが好きだからでしょうか」と当時を思い出す。以来、送迎バスの運転や冬期間の除雪など、病院のサービス向上に努めてきた。

バスの運転士は、病院の「顔」としての役割も持つ。職員はもちろんだが、時には見舞いに訪れる人や患者さんとふれあうこともある。さりげなく、しかし注意深く人々を観察し、乗降の際などには先回りして手を差し出す。「乗る人の安全を守ることが何より。気持ちよくバスに乗っていただくた

めにも、安全の確認とコミュニケーションには気をつかいます」。この仕事はサービス業、自分とのふれあいが病院の入口になるので、そこで信頼感を持ってもらうことが職務、と強調する。

溪仁会グループがめざす理念も理解している。求められるサービスの質が、この26年間で大きく変化してきたことも感じる。しかし、誠実に自分の仕事を果たす、という姿勢に変わりはない。「あくまでも自分は自然体。皆さんからの“ありがとう”という言葉や笑顔のために努力するだけです」

休日、尻別川で自慢のフライロッドを振ることがリフレッシュになっている。「川に恵まれた環境と、人とのふれあいがある職場。これが若さを保つ秘訣です」。仕事への誇りを胸に、今日も安全運行でバスを走らせる。

この**道**を ひらく。

そこに在る
プロフェッショナル
マインド

いつの時代も愛されるサービスを心に、
“自然体”で、人々の笑顔を運ぶ。

定山渓病院 サプライサービス課
加藤 克廣
KATOH KATSUHIRO



先輩からのメッセージ

渓仁会グループとともに長年歩んできた職員や、かつて渓仁会グループで活躍したOBの方々に、心に残るエピソード、渓仁会グループへの思い、未来に期待することなどをうかがいました。



NPO法人シーズネット
代表
岩見 太市さん

健康と高齢期の生き方をケアする 高齢者医療を実現してほしい

私が西円山病院に勤め始めたのは昭和61年のことでした。当時、東京で加藤隆正初代理事長にお会いしてお誘いをいただき、もともと北海道という土地に憧れがあったこともあり、移住を決めました。

西円山病院では最初に、地域活動を担当しました。当時は療養型の病院が増え始めたころで、西円山病院も新棟完成を控え、地域とのつながりが課題でした。ボランティアグループ「銀の舟」の活性化や、現在のサラネットにつながる広報誌「健康なかま」を創刊し、地域の方々に病院の活動をご理解いただくように努めました。やがて成果が認められ、次に渓仁会グループ内の各病院に患者人数に応じてソーシャルワーカーを配置し、グループ内での連携を取る総元締めとしての役割を任せさせていただきました。

札幌に来たころは知り合いがなく、地域の老

OBの方々から

人クラブや民生委員に飛び込みで会って、地域のネットワークを広げました。知り合いができるまでの寂しい気持ちと、仕事のご縁でできた人脈が、現在高齢者のネットワークをつくる活動を始めるきっかけとなりました。在籍当時一緒に仕事をしていたソーシャルワーカーの方々から、高齢者医療の情報をいただけるのも、活動の助けとなっています。

創業30周年を迎えたこと、各地で渓仁会のいい評判を耳にすることは、ともにOBとして誇らしいことです。将来に向けて、高齢者医療の重要性はますます増していますから、病気だけを診るのではなく、暮らしを診る医療を実現してほしいですね。私はシーズネットで「健康な体での生き方づくり」を提唱しています。健康は目的ではなく手段ですから、健康の先の高齢期の生き方を見つめたケアを続けていただきたいと思います。



介護老人保健施設 ゆあみーる
事務次長
 笹岡 新二さん

渓仁会の理念やサービスへの考え方は 今も仕事をする上での基本になっています

私は1982年から7年間、渓仁会グループに在職しました。最初は定山渓病院の相談室にソーシャルワーカーとして入職し、6年間勤務した後に、西円山病院に異動となりました。

その頃の定山渓病院には整形外科や循環器科などがあり、一般的の外来患者さまも来院されていました。また、西円山病院は今と同様、院内広報誌の発行やボランティアとの連携など、外に開かれた高齢者病院として特色を打ち出していました。在職した7年間で多くのことを学び、医療や福祉に携わる上での基礎を築くことができました。

私が勤務していた当時は、今ほど施設数や

OBの方々から

職員数は多くありませんでしたが、病院内での勉強会や研修発表会への参加なども盛んに行われており、誰もが自主的にスキルアップを図ろうという高い意識を持っていました。

現在は、岩見沢市の介護老人保健施設に勤務しています。ボランティアさんにも協力してもらうなど、渓仁会での経験が生かされています。近くにある「コミュニティホーム美唄」は、互いに切磋琢磨する良きライバルです。私たちも利用者さまに喜ばれる施設運営をめざし、福祉サービスの向上に取り組んでいます。



社会福祉法人渓仁会 理事
事業開発推進室長
兼 カームヒル西円山施設長
菊池 達行

職員それが意思を持った集合体として 大きな組織を支えることが未来につながる

私が渓仁会グループに入職したのは、今から22年前。一般企業から定山渓病院の事務職員、というまったく畠違いからの転職でした。

当時は今ほど組織は大きくなく、社会福祉法人の施設も「西円山敬樹園」のみでした。やがて、1989年に「コミュニティホーム白石」を開設することになり、その立ち上げスタッフとして異動になりました。それからは八雲、美唄、岩内と地方での介護老人保健施設の開設に携わってきました。

思い出されるのは、最初に手がけた「コミュニティホーム白石」のことです。それまで福祉行政のことは何も知らず、また老人保健施設も全国で7つのモデル施設ができたばかりということもあり、手探り状態での開設でした。開設予定日近くになって、ようやく認可が下りたときは、自宅でしみじみと祝い酒を飲んだのを鮮明に覚えています。

永年勤続の職員から

今年で創業30年という節目を迎え、組織としてはたいへん喜ばしいことだと感じています。しかし私個人は、秋野理事長が話されているように現在は第二の創業期であり、6年目を迎えたところという意識でいます。

医療や福祉の世界は組織内で完結してしまうことが多い、他にはなかなか目がいかないものです。幸い、渓仁会グループには多くの組織が集まっています。ぜひ、職員の皆さんには同じグループの仲間としての意識を持ち、互いに理解し合う心を持ってほしいと思います。

巨大なグループというだけでは、いつか小回りが効かなくなり、倒れてしまうかもしれません。しかし、職員一人ひとり、組織一つ一つが小さな意思を持つ集合体であるなら、生き残っていくことができるはずです。そうした組織風土があれば、必ず未来につながっていく信じています。



手稻渓仁会病院
医事課長
関谷 公栄子

一致団結して目標に立ち向かう 強い絆とチームワークはずっと変わらない

私は手稻渓仁会病院の開設準備室時代に入職しました。病院の建物が完成したときには、その大きさにびっくりしたことを覚えています。

実は1987年12月の開院当日に外来患者さまは68人、次の日はたった17人しか来院されませんでした。今では1日あたり1500人にも上ることと比べると、想像もできない話です。それでもスタッフは対応に必死で、「このままどうなるんだろう」と不安になりましたが、1週間ほどでスムーズに回転し始めました。

手稻渓仁会病院は開院以来、常に新しいことに取り組んできました。電子カルテの導入や手稻渓仁会クリニックの開院、救命救急棟の

永年勤続の職員から

開設などがあるたびに、現場は大騒ぎになるのですが、不思議なことに必ず1週間すると自然に落ち着くのです。これは、何か目標や課題があるときには、すべての職種が団結して解決にあたるという、渓仁会ならではの特徴だと思います。「患者さまのために何とかしよう」という思いを、みんなが共有しているからではないでしょうか。

渓仁会というのは、働く者にとっても、地域の人たちにとっても信頼できる組織だと思います。グループがいくら大きくなても、こうした良さは失われないと感じています。

医療法人渓仁会

手稻渓仁会病院

札幌市手稲区前田1条12丁目1-40 ☎ 011-681-8111

地域医療を支える中核病院として

常に挑み続けることが使命

当院は「患者主体の医療に徹する」という基本理念のもと、1987年に開院いたしました。以来、地域の中核病院として総合的な急性期専門医療に取り組むとともに、救急医療の強化や研修医教育にも力を注いできました。

救命救急については、1997年に救急部門を創設し、365日・24時間体制での受け入れを実現。2005年には救命救急センターの指定を受け、北海道で初となるドクターへリ事業も開始いたしました。また、小児NIVセンターやがん治療管理センターの開設など、地域に根ざしながらも、常に全国レベルの医療をめざしております。

急性期病院としての機能を持つ当院は、他の医療機関との協力体制を築き、地域医療連携を進めてきました。各医療機関が得意分野を生かし、機能を分担することで、より最適なサービスが提供できると考えています。

本年10月には、待望の手稻家庭医療クリニックが始動いたしました。また将来的には、マンパワーの充実を図り、一般診療365日体制で行う構想もあります。地域住民の皆さんに誇りに感じていただける医療機関をめざし、常に挑戦を続けていきたいと考えています。



手稻渓仁会病院院長
田中 繁道

手稻渓仁会病院

DATA

稼働病床数 547床

内 救命救急センター 19床

ICU 12床

SCU 6床

開放型病床 5床

診療科目

内科・呼吸器内科・循環器内科・消化器内科・血液内科・腫瘍内科・腎臓内科・外科・呼吸器外科・消化器外科・心臓血管外科・整形外科・脳神経外科・形成外科・精神保健科・リウマチ科・小児科・皮膚科・泌尿器科・耳鼻咽喉科・頭頸部外科・産科・婦人科・眼科・放射線診断科・放射線治療科・病理診断科・麻酔科・救急科・口腔外科・小児歯科・歯科

主な特徴

救命救急センター・厚生労働省救急医療対策事業・ドクターへリ導入促進事業実施主体(基地病院)・臨床研修指定病院・ISO9001/14001認証(審査登録)・日本医療機能評価機構認定病院(一般病院)・プライバシーマーク認定・DPC対象病院など

[沿革]

1987年	12月	手稻渓仁会病院開院
1988年	7月	救急病院指定
1990年	3月	総合病院承認
1997年	4月	厚生省臨床研修病院指定
1998年	4月	メディカル手稻開設
1999年	7月	開放型病床承認
2000年	5月	手稻渓仁会クリニック開院
2001年	2月	ISO9001審査登録
2004年	1月	ISO14001審査登録
2005年	3月	救命救急センター指定
	4月	ドクターへリ正式運航開始
	9月	日本医療機能評価機構認定
2006年	4月	DPC対象病院指定
2007年	5月	救命救急センター開設
		地域連携福祉センター開設
2008年	4月	小児NIVセンター開設
		がん治療管理センター開設
2009年	4月	地域がん診療連携拠点病院
	10月	手稻家庭医療クリニック開院



一人でも多くの生命を救うために [ドクターへリ事業]



ドクターへリとは、救命救急処置を必要とする救急現場へ、速やかに救急専門医師と看護師を派遣し、治療開始時間の短縮を図る救急医療専用のヘリコプターです。また、患者さまの状態に応じ、決定的な治療が可能な医療機関への搬送時間短縮という役割も担っています。

当院では、2005年3月の救命救急センター設置にあわせて、同年4月から道央ドクターへリの基地病院に指定



され、本格的な運航を開始しました。迅速かつ的確な治療が必要とされる救急医療の現場において、一人でも多くの患者さまを救う取り組み

として、地域からの大きな期待に応えています。

当院はドクターへリについて、2002年より周辺自治体や医療機関、消防機関と協力して「北海道ドクターへリ運航調整研究会」を設立。研究運航を重ねたうえで、導入を実現しました。現在、運航圏域は道央圏および、手稲渓仁会病院を中心にして半径100キロメートル圏内となっています。

北海道のような広域なエリアでは、ドクターへリの機能がより重要となります。当院ではドクターへリの安全かつスマーズな運航をめざし、地域の消防機関、その他関係機関との連携にも力を注いでいます。

北海道ドクターへリ運航実績

	総出動要請件数	出動件数	未出動
2005年度	346件	261件	85件
2006年度	496件	389件	107件
2007年度	566件	453件	113件
2008年度	522件	430件	92件

がん治療を受ける患者さまの視点に立つ [がん治療管理センターの開設]



患者さまができるだけ安心して治療を継続できる体制づくりをめざし、2008年4月に「がん治療管理センター」を開設しました。同センターには4つの部署があります。抗がん剤の種類が増え一人ひとりに合わせた投薬が可能になったことから、自宅での生活や仕事を続けながら通院で治療を受けられる「外来化学療法室」。がんそのものや治療の多くに伴う体と心の痛みを和らげる「緩和ケア

室」。患者さまとご家族、地域の方々への相談業務やセカンドオピニオン外来の受付などを行う「がん相談支援室」。4名のがん登録士を配置し、がん患者の情報の集計と分析を行うことで早期発見や治療効果の向上につなげる「医療情報・がん登録統計室」です。

当院のこうした個々の分野を充実させる取り組みや職員の熱意、これまでの治療実績などが背景となり、2009年4月、厚生労働省により「地域がん診療連携拠点病院」の指定を受けました。地域の拠点となる医療機関として近隣病院とのがん診療連携を図りながら、がん治療を受ける患者さまの視点に立った、充実したがん治療への取り組みを進めています。



地域の皆さんと手を取り合って [市民公開講座の実施]



当院では、患者さまやそのご家族を対象にした市民公開講座を開催してきました。近年は、特に関心の高い、「腎臓病教室」と「母親教室」の2教室を実施。入院患者さまやご家族、地域住民の方なども含め、多いときでは80名ほどが受講されました。



講義では、医師や看護師、薬剤師、管理栄養士などが診療面や生活面などへのアドバイスを行い、会場からの質問にも各専門職がわかりやすく回答。「実践しやすい内容で、役に立った」と好評を得ています。

また、当院が2009年4月1日に、厚生労働省より地域がん診療連携拠点病院の指定を受けたことに伴い、がんに関する市民フォーラムの開催も始めました。毎回、具体的な症例などの講演に続き、医師、看護師や医療ソーシャルワーカーらと交流する機会を設けています。この他、悩みや不安を持つがん患者さまが、同じ悩みを持つ方々や医療者と情報交換し、ともに支え合う場となることをめざして月に2回、定期的に、がん患者サロン「さくら会」を開設しています。

こうした取り組みは、地域の皆さまのニーズに応える医療機関としての役割でもあります。これからも皆さまの声を取り入れながら、継続していく考えです。

患者さまの診療計画をスムーズに [地域連携クリニカルパス]

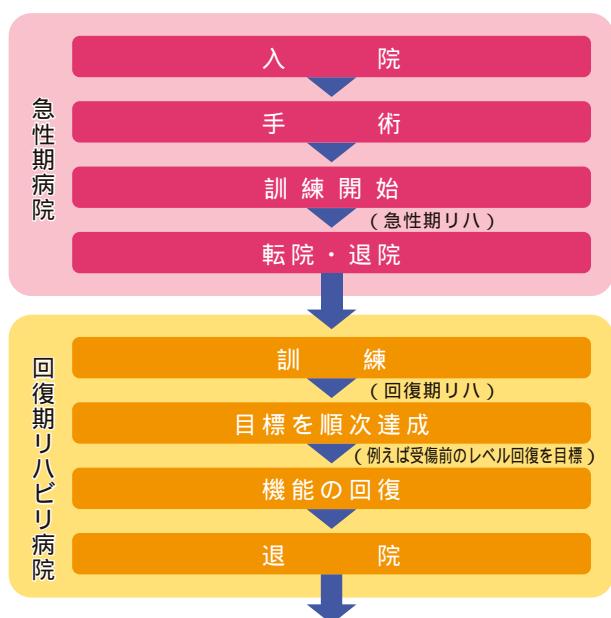


当院では地域医療連携を推進してきました。その取り組みの一環として実用化したのが地域連携パスです。地域連携クリニカルパスとは、入院から回復、在宅までのケア全体を示した診療計画のことで、関係する機関同士で患者さまの情報を共有するために用いられます。北海道ではまだ実施地域は少なく、手稲周辺地域では当院を中心となって、「大腿骨近位部骨折地域連携パス」と「脳卒中地域連携パス」が導入されています。

地域連携クリニカルパスによって診療を可視化し、治療が終わるまでの方針をわかりやすく示すことで、転院後や在宅に移ってからも診療がスムーズになり、患者さまは的確な治療を受けることができます。また、治療が現在どの段階にあるのかといった情報を、患者さまやご家族と共有することで、安心して治療に臨んでいただけます。

これからはさらに地域連携クリニカルパスによる提携医療機関のネットワークを広げ、適切で迅速な医療サービスの実現に向けて努力していきます。

急性期病院と回復期リハビリ病院との
地域連携クリニカルパスイメージ



「医療機関とのスムーズな連携が、地域医療の質を守る」

- 地域医療連携への取り組みを考える -

手稲渓仁会病院では、かねてから地域での医療連携を推進してきました。地域全体の医療の質を守り、さらにそれぞれの機能強化を図る取り組みについて、地域連携福祉センター長として医療連携をすすめてきた田中繁道院長を中心に、これまでの活動や今後の展開などについて考えていきます。



手稲渓仁会病院
院長・
地域連携福祉センター長
田中 繁道



手稲渓仁会病院
リハビリテーション部
部長
青山 誠



手稲渓仁会病院
地域連携福祉センター
課長
清水 信明

医療機関が手を取り合う 連携システムをめざす

田中 今年の11月で地域連携福祉センターが開設してまる2年になります。だいぶ時間がかかりましたが、ようやく地域医療連携のシステムが回り出したと思っています。

清水 現在は193の医療機関が当院と提携されています(2009年11月現在)。地域連携福祉センター経由の紹介数も着実に増えています。医療機関にも患者さまにも、地域医療連携が少しづつ理解されてきました。

田中 私が当院にきた1997年当時は、すでにベッド数不足が問題となっていました。救急医療を受け持つ当院としては、急性期の機能を強化する必要があると強く感じました。その頃、医療連携という言葉はまだ一般的ではありませんでしたが、近隣の医療機関との協力関係を築き、互いに補い合いながらやっていくことが解決策になると考えたのです。地道に他の医療機関に働きかけを行いましたが、なかなか理解が進みませんでした。そこで2004年に「逆紹介をしよう!」という院内宣言を出したのです。当院が積極的に患者さまを紹介すれば、他の病院も信頼してくれるはずだと。院内にはとまどいもありましたが、それをきっかけに、大きく前進しました。

清水 私たちも、他院の先生方と直接会って、当院の地域医療連携の仕組みやメリットについてご説明してきました。外部との情報共有もできる限り行うなど、提携医療機関に信頼される運営を心がけています。

田中 患者さまにとっても、力ゼをいいときなどは、当院で何時間も待つよりも近くの病院でスピーディな診察を受けた方がいいはずです。当初は、逆紹介で他院への転院をすすめると、涙ぐまれる患者さまもいらっしゃいました。しかし、何かあればいつでも引き受けますよ、という姿勢を示すことでとても安心されるようです。

青山 転院先から外来通院される方もいます。どのように経過をみていくかは、患者さまに選択してもらうことで、スムーズに移行できているように思います。早いタイミングで転院したことが、すごく良かった、という評価も多くいただいています。

地域の患者さまと医療機関に 信頼される中核病院として

田中 地域医療連携を推進するなかで、非常に大きな役割を果たしているのが地域連携クリニカルパスです(28

ページ参照)

青山 現在、運用されているクリニカルパスは、大腿骨近位部骨折地域連携バスと脳卒中地域連携バスです。リハビリ専門の医療機関に、患者さまの回復期リハビリを担当してもらう上で、必要な情報を急性期病院から回復期病院へ伝える情報伝達ツールとして汎用性の高いバスをつくりました。また、本バスは退院後の患者様情報を回復期から急性期へ伝えるツールとしても使われます。

田中 このバスはとてもよくできていって、十分な情報が網羅され、どの医療機関でも使いやすくなっています。脳卒中地域連携バスは、すでに全道的に広

がっていますし、大腿骨近位部骨折地域連携バスも今年から運用エリアが広がる予定です。標準的なバスとして全道に根付いてほしいと思っています。

青山 患者さまの満足度もかなり高くなっています。実際、リハビリ専門病院で、回復期リハビリを行うことによって、機能レベルが向上し、自宅復帰率が高まるという結果が出ています。リハビリに特化した病院ならではの、きめ細かなケアによるものだと思います。

田中 各病院が機能分化することで、その病院が得意とする機能は強化されます。医師や看護師、コメディカルスタッフなどスタッフのレベルも上がりります。それによってサービスへの満足度も高くなるのです。

清水 現在は、慢性腎臓病と、PSA検査後の地域連携バスについても準備が進んでいます。すでに地域連携バス運用のノウハウがあるので、スムーズに進むと期待しています。

青山 病院間の信頼関係がないと、医療連携は成立しません。今後はかかりつけ医やケアマネジャーなどを含めて、信頼関係をつくり上げることが大切です。その後であれば、連携バスも浸透しやすいでしょう。

田中 地域医療連携の取り組みは、手稲渓仁会病院にとっての使命です。地域の中核病院として、住民と医療機関から信頼されること。そして互いに手を取り合いながら進んでいくこと。“一緒に医療をやっていく”という姿勢で、地域の医療サービスの質を守っていきたいと考えています。

医療法人渓仁会

札幌西円山病院

札幌市中央区円山西町4丁目7-25 ☎011-642-4121

2009年11月名称変更

ステークホルダーの皆さんに支持される

高齢者医療の未来に向かって

開院30周年となる当院は、高齢者医療において、常に全国の先駆けとなる事例に取り組んでまいりました。今年の11月には「札幌西円山病院」と改称し、歴史の継承と、新たな時代へ向かう決意を新たにいたしました。

当院では30年間変わらぬ理念として、「親切 丁寧 敬愛」を掲げています。これは、患者さまやご家族、スタッフなどすべての人とのコミュニケーションの基本であり、当院が30年続いてきた根幹であると考えています。

現代の日本は高齢化率が21%を超える、“超”高齢社会となっています。激変する医療制度のなか、質の高い医療を実現するには、治療の「根拠」となるエビデンスの確立が必要と考え、1990年代の後半からは科学的な知見に基づく高齢者医療を実践してまいりました。

神経内科学を中心とした老年医学、リハビリテーション医学、老年看護が当院の柱です。この3点に磨きをかけながら、患者さまの生活の質はもちろん、当院を支えるスタッフの人生の質にも目を向け、これからも一步一步誠実な活動を積み重ねていきたいと考えています。



札幌西円山病院院長
峯廻 攻守

DATA

移動病床数 869床
内 介護療養型医療施設 310床
療養病棟入院基本料 301床
障害者施設等13対1入院基本料 169床
回復期リハビリテーション病棟2 89床

診療科目

内科
神経内科
リハビリテーション科
循環器内科
歯科

主な特徴

ISO9001/14001認証(審査登録)
日本医療機能評価機構認定病院
プライバシーマーク認定
通所リハビリテーション / 訪問リハビリテーション併設 など

[沿革]

1979年 6月 西円山病院開院
1990年 7月 医療福祉サービスセンター開設
12月 患者家族の会設立
2000年 6月 NSTチーム (Nutrition support team)立ち上げ
2001年 1月 ISO9001審査登録
2004年 1月 ISO14001審査登録
2007年 3月 日本医療機能評価機構認定
10月 院内保育所「西円山ピッコロ」新築
2009年 11月 札幌西円山病院に改称



患者さまの喜びのために [リハビリテーションの充実]

目的 効果的なリハビリテーションの提供 → 結果 ADL(日常生活活動)の向上、在院日数の短縮

高齢の患者さまにとって、心身に働きかけ、機能の回復や維持、低下を防ぐためのリハビリテーションは非常に大きな意味を持っています。当院では、患者さまの各ステージに応じたリハビリ体制を充実させています。

入院患者さまのリハを回復期、維持期、緩和期に大別し、それぞれ必要なりハビリを提供。回復期については、専門医を中心に、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士によるチームアプローチを行い、365日体制でリハビリを実施しています。また維持期は個別リハに加えて、レクリ



エーションワーカー、健康運動指導士、音楽療法士といった専門スタッフによるグループリハを実施。患者さまが楽しみながらリハビリに参加できる環境づくりを行っています。

在宅については、通所リハビリと訪問リハビリをそれぞれ充実させています。チームには言語聴覚士も交え、在宅でのリハビリ支援を強化してきました。

適切なリハビリの提供によって、生活機能の向上や早期回復といった効果が出ることも実証されています。今後も、患者さまにとって必要なりハビリを追求し続けていきます。



高齢者医療のモデルとして [高齢者デイケアの取り組み]

目的 高齢者のための在宅リハビリの充実 → 結果 利用者のQOLやADLの向上、在宅での機能低下予防

当院は、1994年に老人デイケア施設基準の認定を受けるなど、介護保険制度の導入以前から、積極的に高齢者のためのデイケアに取り組んできました。利用者さまが本当に必要とされるサービスの実現をめざし、他の病院や施設に先駆けて通所リハビリテーションを実施。退院後の継続的なケアや、在宅で療養される方の機能維持に向けたリハビリ、健康管理など、幅広くサポートしています。

現在、デイケア部に所属するリハビリスタッフは作業療法士3名、理学療法士1名、病棟と兼任の言語聴覚士1名の合計5名。また、専任の看護師が3名、介護スタッフが9名おり、互いに連携しながら、身体リハや趣味的活動、入浴サービス、集団体操などを提供しています。その他、口腔機能向上、栄養マネジメントを歯科衛生士、管理栄養士と協力して行っています。近年の傾向としては、40代・50



代の利用者さまも増えているため、それぞれの方の生活環境を考慮しながら、積極的な回復リハや社会的交流活動なども取り入れています。

これからはデイケアの役割がますます重要になると予想されます。これからも当院のスローガンである「親切丁寧 敬愛」の心を大切に、地域の皆さんに信頼されるデイケアをめざしていきます。



広がる環境への配慮

[バイオディーゼルバスの導入]



環境への配慮も社会的責任における大きな命題と考え、渓仁会グループ全体で継続的に環境問題に取り組んできました。当院ではミックスペーパーや感染性廃棄物のリサイクルなどのほかに、2008年9月から、地下鉄円山公園駅と当院間の送迎バスにバイオディーゼル燃料を使用しています。



バイオディーゼル燃料とは、主に植物性油脂をディーゼルエンジン用に加工した燃料のこと。二酸化炭素の排出量を減らし、さらにガソリンなどの化石燃料使用を低減する効果もあります。また、排気ガス独特の臭いや黒煙も少ないため、生活環境にやさしいクリーンエネルギーと評価されています。当院では、厨房で使用した天ぷら油などの植物性廃油を再生業者に回収してもらい、バイオディーゼル燃料にリサイクル。さらに、その燃料を送迎バスに使用することで、資源の有効活用や環境への負荷低減を図っています。

現在、バイオディーゼルバスは日中に運行している1台ですが、1日の走行距離が130kmにもなり、メリットも出ています。当院ではこれからも環境負荷を低減するための活動に、積極的に取り組んでいく予定です。

音楽で心の安らぎを

[月例ロビーコンサート]



当院では2006年12月から、定期的にロビーコンサートを行っています。入院患者さまとそのご家族に音楽を楽しんでいただく機会を提供し、少しでも心豊かな入院生活を送っていただこう、という思いから始まりました。看護部、リハビリテーション部、サプライサービス課、医療福祉課が連携し、病院全体の取り組みとして運営しています。

プログラムは季節に合わせて企画し、クラシック演奏や声楽、合唱、ハワイアンなど、毎回趣向を凝らした内容になっています。ボランティアの方や病院スタッフ、患者さまのご家族にも出演していただき、多くの方々に楽しんでいただけるよう工夫しています。回を重ねるごとに、来場される患者さまや、付き添われるご家族の方が増え、今では当院の恒例イベントとして定着しました。

当院は入院患者さまにとって、生活の場でもあります。



コンサートによって、心の安らぎや喜びを感じていただくことが入院環境の質向上につながると同時に、ご家族とふれあう大切な機会にもなっています。これからもご期待に応えるよう、バラエティ豊かなプログラムを提供していく予定です。

「質の高い高齢者ケアを届けるために」

札幌西円山病院は、開院当時に制定した「親切 丁寧 敬愛」の理念のもと、要看護・介護老年病患者さまへの医療サービスを行ってきました。30年の歴史を重ねた高齢者へのケアについて、櫻谷憲彦副院長を中心に現場を支える若手スタッフたちが、現状と将来の展望を語り合います。



札幌西円山病院
副院長
櫻谷 憲彦



札幌西円山病院
看護師
菅野 衣美



札幌西円山病院
介護福祉士
前田 正浩



札幌西円山病院
作業療法士
窪田 真理

疾患と折り合いをつけて 予後を楽しく過ごしてもらう。

櫻谷 札幌西円山病院では、入院患者の多くを療養の患者さまが占めています。しかも、自分たちの親や祖父母のような高齢の患者さまがほとんどです。

菅野 高齢の方は抱える疾患がいくつもありますから、疾患との付き合い方、より良い予後を考えることが大切です。例えば、糖尿病でも厳しいカロリー制限ではなく、悪化しない範囲で食事を楽しんでもらいたいなど。

櫻谷 医師や看護師は目の前の病気を治そうと動き出しますが、介護やリハビリなど、他のスタッフが集合的に見てくれて、いかに残された日々を快適に楽しく過ごしていただくかということで力を合わせてくれます。

窪田 私たちは、患者さまの生活をより良いものにするため、生活の中で困っている事に着目し、心身機能や環境に対するアプローチを行っています。関わる時間は限られていますが、個々の思いを捉えられるよう寄り添う姿勢を大切にしています。

菅野 看護師にも目の行き届かないところはありますので、日常生活の援助を担う介護福祉士は、日常生活援助の専門職として大切な存在ですね。

前田 高齢の患者さまは、飲水や食事などの日常動作にとても時間がかかります。でも、コミュニケーションの機会や、楽しみを持つのが生活の質という点では大事だと思います。だから介護では、個人の趣味一嗜好に当てる時間となるべく多く作ることをめざしています。

安田 高齢者の栄養状態は、疾患や口腔問題など、多くの要素が関わってきますので、栄養士もカンファレンスに参加し、他職種と連携して栄養ケアを考えます。また、毎日病室を訪問して、患者さまや病棟のスタッフから情報を集めています。喫食量の減少がみられる患者さまでは、問題の原因を探ることで低栄養状態になる前に解決していくことが重要になります。

涌澤 私も他職種と連携しながら患者さまの生活の質を考えるようにしています。書道や詩吟などのボランティア活動を紹介するなど要望に応えることもあります。

より良い療養生活を送るために患者さま・ご家族の気持ちに寄り添い信頼関係を築いていくことが大切と考えています。

介護病棟の厳しい現状。 “安心”を提供し続けるために。

櫻谷 2012年に介護療養病棟が廃止になると、行き場のなくなる方が出てくるでしょう。医療との関わりが少ない施設へ移れる人はわずかです。どうなるか想像ができませんが、できるだけ診てあげたいという思いがあります。

涌澤 患者さまやご家族と接していく「病院にいたら安心」という思いを感じます。ただ、これから病院にいられなくなるかもしれないという不安を持っているご家族は多くいます。そうした思いを受けとめながら今後のことを一緒に考えていきたいですね。

菅野 入院されている患者さまは、高齢や重症者のため、自分の意思を伝えられない方が多いです。そうすると、家族がどう看取りたいかという思いを聞



札幌西円山病院
管理栄養士
安田 真紀



札幌西円山病院
社会福祉士
涌澤 美佳

くことがより重要になってきます。

窪田 患者さまや病棟スタッフが抱えている問題をいち早く解決できるよう、リハビリスタッフも病棟とのコミュニケーションをより強められるよう専従体制がとれればと思います。

菅野 看護側としてもリハビリについて、いつでも相談できる人がいると心強いですね。また、看護師が生活まで観察できることが一番ですが、全体的に人手が足りないので、介護福祉士と深くコミュニケーションを取るようにして補えればと思っています。

前田 療養が長期になると、患者さまはずっと同じような環境にいるので、そのまま単調な生活リズムができてしまします。もっと私たちが患者さまの生活に介入してリズムを変え、生活の質を高めていきたいですね。

安田 生活の質という点では、食事は切って離せません。低栄養状態の改善だけでなく、QOLを改善する栄養ケアをしていきたいです。そのために、いろいろな問題を整理する技術を身につけることが自分の課題だと思っています。

櫻谷 当院のスタッフはどうしたら尊厳を持って患者さまが人生を終えられるだろうかということを大切にして、頑張っています。今後も気持ちを一つにして高齢者のケアに取り組んでいきたいと思っています。

医療法人渓仁会

定山渓病院

札幌市南区定山渓温泉西3丁目71 ☎011-598-3323

良質な慢性期医療がなければ
これからの日本の医療は成り立たない

当院は、長期の入院が必要な方を対象とした療養型の病院です。患者さまにとって最良の医療環境を築くため、これまで革新的な取り組みを続けてきました。

1999年には「抑制廃止宣言」を行い、職員一丸となって抑制の廃止に取り組んできました。また、ターミナルケアについても早くから検討を重ね、職員が認識を共有できる体制を確立しました。すべての患者さまへのリハビリテーションの実施やNST委員会の設置など、良質な医療の実現を目指し、さまざまな活動を推進しています。

ケアの質を支えているのは、常に努力する職員の高い意識です。患者さまとのかかわりに喜びを感じ、当院で働くことを誇りに思える環境づくりも重視しています。

近年は、医療の性質を広くとらえる狙いから、慢性期医療という表現が浸透してきています。私たちのミッションは、この慢性期医療において日本で有数の病院をめざすこと。職員が持つ仕事への情熱と確かなチーム力を糧に、病院としての力を高めることで、やがて医療全体の質を上げることにも貢献したいと考えています。



定山渓病院院長
中川 翼

DATA

稼働病床数 386床

内 医療療養病棟 292床

特殊疾患病棟1(一般病床) 94床

診療科目

内科

神経内科

リハビリテーション科

歯科

主な特徴

ISO9001/14001認証(審査登録)

日本医療機能評価機構認定病院

プライバシーマーク認定

通所リハビリテーション /

介護予防センター併設 など

[沿革]

1981年 5月 定山渓病院開院

1996年 10月 新棟完成

1998年 11月 日本医療機能評価機構認定

1999年 7月 抑制廃止宣言

2001年 1月 ISO9001審査登録

2004年 1月 ISO14001審査登録

2006年 10月 新新棟完成



人権を尊重した思いやりのあるケアを [抑制廃止宣言]

目的 院内の身体拘束をゼロに

結果

18ヶ月でゼロにすることができ、患者さまの生活の質と医療サービスを向上

長期療養される患者さまのなかには、院内を徘徊されたり、点滴の管や医療チューブを抜いてしまう方もいます。かつての医療現場では、そうした行動を制限するため、患者さまの手をひもでしばったり、柵でベッドを囲うといった行為が行われていました。

当院では、1999年7月にこうした「抑制」と呼ばれる行為を全面的に廃止する「抑制廃止宣言」を行いました。患者さまの人としての誇りを尊重した、思いやりのあるケアの実現をめざし、病院全体で運動に取り組んだ結果、院内の抑制を18ヶ月でゼロにすることができました。たとえ言葉であっても患者さまの人权をないがしろにする行為はあってはいけない、という理念のもと、抑制を伴わない安全なケアを実現した活動は、先駆的な事例として全国から注目を集めました。

この取り組みを広げるために、「北海道抑制廃止研究会」の事務局として研究会の開催などを行い、抑制に関する相談窓口としての活動を担っています。また院長、看護

部長は、NPO法人「全国抑制廃止研究会」の副理事長・理事として、「北海道身体拘束ゼロ作戦推進会議」では座長・委員として活動に加わっています。

抑制廃止宣言

- ・私たちは、このたび「抑制廃止」を宣言いたします。
- ・人としての誇りを尊重し、思いやりのあるケアを行います。

- ①抑制とは何かを考え、行動致します。
- ②抑制をなくすことを決意し、実行致します。
- ③抑制を限りなくゼロに近づけるよう努めます。
- ④継続するため、いつでも院内を公開致します。
- ⑤抑制廃止を地域に広げるよう努力致します。

平成11年7月29日

 医療法人 溪仁会
定山渓病院

終末期のあり方を見つめて [終末期医療の取り組み]

目的 望ましい終末期医療のあり方を検討

結果

独自の同意書による定山渓病院方式の取り組み

当院のような療養型の病院で亡くなられる方は、2000年の介護保険導入以降も増える傾向にあります。特に70歳以上の高齢者の場合、療養病床で亡くなる方の割合が一般病院での数を大きく超えています。こうした実状から、当院では終末期医療(ターミナルケア)のあり方につ

いて病院全体で検討を重ね、望ましい医療の提供に努めできました。

1997年4月から1999年3月にかけて、医師と看護師の役職者による「ターミナルケア検討会」を実施。終末期を迎えた方への対応や、亡くなった方への終末期医療(ケア)に関する事例などを話し合う場を持ち、医師と看護師が情報を共有しながら終末期医療に取り組む体制を築きました。現在は、各病棟で「ターミナルケアカンファレンス」を行い、治療やケアにかかる全職種が参加して、患者さま本人やご家族が望まれる終末期医療を提供できるようにしています。また、患者さまが亡くなつて2週間以内に「死亡後カンファレンス」を実施し、提供された終末期医療について反省や評価を行っています。

患者さまが少しでも安らかな時を過ごし、ご家族にも安心していただけるように、終末期医療への取り組みはこれからも続きます。



チームによる栄養管理サポート [NST委員会の活動]



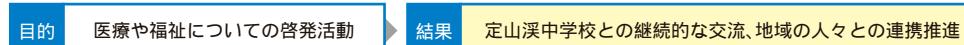
当院の入院患者さまの多くが長期療養を必要とし、平均年齢も高齢になっています。こうした患者さまの栄養状態や栄養摂取状況を把握し、適切な栄養管理サポートを行うのがNST(Nutrition Support Team)です。専門職種が連携して対策を図ることにより、低栄養の改善といった効果をあげています。

当院では、2004年にNST委員会を立ち上げました。医師、看護師、管理栄養士、言語聴覚士、薬剤師、MSWによって構成され、すべての患者さまの身体状況に合わせた食事形態の検討を行っています。まず患者さまが入院された時点で、その方の栄養ケアに関する方針を検討し、食の提供方法も含めて的確な栄養管理を実施。その後、必ず半年に1回はプランの見直しを行い、栄養状態や体調の変化があれば、栄養管理の方針を再検討します。

NST委員会は毎月1回開催され、職種同士の報告や事例検討が行われるほか、全職員を対象にした勉強会の実施など、院内での啓発活動にも取り組んでいます。2008年には日本静脈経腸栄養学会の「NST稼働施設」として認定されました。NSTの有効性をより高めるために、院内の連携強化をめざしています。



地域との温かな交流 [病院体験学習の受け入れ]



当院では長年にわたり、近くにある札幌市立定山渓中学校とのふれあい交流を続けてきました。2000年からは病院関連職業体験の受け入れを始め、毎年、全学年の生徒さんが院内での体験学習に参加しています。

体験学習の前には当院の職員が定山渓中学校を訪問し、病院全体の説明や各職種の業務内容などを紹介。医療や福祉の世界をイメージしてもらった上で、体験学習を実施します。内容は、院内見学やボランティア活動の手伝い、食事介助などの病棟体験、リハビリテーション訓練体



験など。職員が講師となって指導を行い、入院患者さまの協力をいただきながら、医療の現場を実際に体験してもらいます。お孫さんにあたる年代の生徒さんとのふれあいは、患者さまにとって喜びでもあり、大切な交流の場になっています。

地域の人々との温かな交流は、「定山渓病院病院祭」や「盆踊り大会」などでも行われています。さまざまなふれあい体験をとおして、医療や福祉に対して関心を持ってもらうことも、地域に根ざした病院としての役割です。

これからも地域と連携しながら、交流事業を推進していきます。



「心通い合うリハビリテーション訓練の提供をめざして」

定山渓病院では患者さまの人権、尊厳、個別性を重んじたケアを心掛けています。特にリハビリテーションについては、1996年頃からはすべての患者さまへの提供をめざし、実現しています。単なる訓練としてのリハビリテーションではなく、リハビリテーションによって患者さまの療養生活をいかに向上させることができるのか、現場で支えるスタッフたちがこれからの課題を探ります。



定山渓病院
理学療法士
河野 伸吾



定山渓病院
作業療法士
後藤 正寛



定山渓病院
言語聴覚士
印牧 志穂



定山渓病院
医療ソーシャルワーカー
金山 晶子

患者さまの心を見つめ、 楽しくできるリハビリを。

河野 定山渓病院には、高齢の患者さまが多く入院しています。高齢の方にとっては、理学療法で行う基本動作訓練でも負荷量が大きいので、リスクを考えつつ、高い効果が得られるギリギリの所を見極めることが求められます。

後藤 日常生活の動作をどのようにしていくのか考えていくことが私たちの作業療法です。どこまでの動作ができるかを患者さまと一緒に探していくといふほうが近いかもしれません。病棟や他の職種と協力しながら介助方法などを決めていきます。

印牧 言語聴覚療法では、同じくらいの重症度の患者さま5～8名で行う集団コミュニケーション療法があります。1対1の訓練だけでは、思ったことをなかなか伝えられずストレスを感じることもあるようですが、他の患者さまと一緒に、皆さんの頑張る姿が刺激となり、身振りでも伝えたいという気持ちが芽生えます。また、当院の特徴として、大部屋で訓練することで、担当以外のスタッフや他の患者さま達と、挨拶が活発に交わされて大切な交流の場となっております。

河野 当院では、リハビリテーション部を中心に、シーテイングクリニックという独自の取り組みをしています。車いすが身体に合わないと、起き上がることができず寝たきりになる可能性があります。身体の状態にあった車いすを提供できるかどうかが、ベッドから離れられるかどうかの一つのキーポイントになってきます。

金山 入院相談時、当院の特徴的な取り組みを含め、リハビリテーションなどについてご家族や患者さまへ説明するのが私の

仕事です。また、入院後も患者さまがどのようなリハビリテーションを行っているか担当のスタッフと情報交換し、ご家族の不安を取り除くことも私たちの重要な役割です。

後藤 長期の入院でストレスを抱える患者さまの気分転換を兼ねて、ご家族へプレゼントする作品を作ることもあります。人のために何かすることで、生き生きとした表情が見られるので、積極的にご家族や他の人の関わりを取れるように考えています。

河野 理学療法でも、患者さまは運動する楽しみのほかに、訓練室に来て人に会う楽しみを感じているようです。かなり高齢になると機能維持が目的となりがちですが、高齢の方でも能力が伸びる方もいます。患者さまお一人おひとりの可能性を見極め、コミュニケーションを取りながら、ご本人の希望を取り入れ、リハビリテーションを楽しくできることを大事にしています。

金山 私たちは患者さまに接する時間が決められていない分、なるべく病棟に上がって患者さまの要望などを確認しています。『リハビリテーションの回数が少ない』と不安を感じていた方もあり、言葉にしない部分も感じ取れるように注意します。直接リハビリテーションに関わっていないなくても、スタッフ全員、チームで患者さまを支える体制を作っています。

よりよいケアを提供するため、 現状のレベルに満足はしない。

後藤 今、私が課題だと感じるのは、患者さまに接する時間が限られるので、病棟での生活を十分に見ていないところです。病棟で、生活場面に密着した関わりをできればと思います。

河野 私の希望としては、もっと福祉用具

を入院生活に取り入れたいと思っています。例えば車いすの工夫や、リフトなどを使えば、より安全に効率的に介助できるようになります。

印牧 言語聴覚士は全体的に経験年数が浅く、後輩をどう教育するのかが課題です。ただ、当科の今年度の研究から、経験年数に関わらず訓練や関わりについて、同じ様なことで困っていたことがわかりました。もう少しディスカッションをすれば、前例がわかつて、その事をスタッフ間で共有できれば今まで以上に前向きに問題に取り組め、質の高いリハビリテーション、患者さまの満足度につながると思います。

河野 理学療法科も1・2年目のスタッフが多く、その教育が課題です。それでも新人期間は手厚い教育体制で、その期間中に、自分でやりたい業務を見つけることができる環境を作りたいですね。(他のスタッフ全員での目配りが必要なので大変ではあります。)また、シーテイングクリニックの取り組みは全国で数少ないのですが、もっと病院外に広めたいし、逆に他の病院などで研修したこと、臨床の場に取り込んで、貪欲に向上していきたいです。それをみんなが同じレベルでできれば、よりよいリハビリテーションを提供できます。

金山 相談業務を通じて、ご家族とリハビリテーションスタッフとの調整役であること、また、シーテイングクリニックや終末期におけるリハビリテーションの関わりなど当院のリハビリテーションを中心とした特徴ある取り組みをお伝えできる存在でありたいです。

後藤 最近は終末期の方が増えています。リハビリテーションの立場でも関わり方の難しさを感じますが、その人らしい生活を大切にして、最後によかったと言ってもらえることをめざしたいですね。

DATA

医療法人渓仁会

渓仁会円山クリニック

札幌市中央区大通西26丁目3-16 ☎011-611-7766

より確実な健診と指導をとおして
北海道の保健に貢献するために

当クリニックは、病気の早期発見と予防を目的とした健診事業、およびその結果に基づく生活習慣改善指導を中心に、地域の健康を守るために活動を展開してきました。各種人間ドックや企業と提携した職場健診、地方自治体の委託による介護予防事業など、札幌市にとどまらず、社会情勢に応じたサービスを提供しています。

2008年4月に特定健診と特定保健指導が義務づけられたことによって、「病気を防ぐ生活」という観点が重視されるようになりました。私どもでは検査・診断の精度向上だけでなく、その後の継続的な指導やアドバイスといったフォローにも力を入れています。また、講演や広報誌の制作など、啓発活動にも力を入れています。

来年度は、ゆとりある環境づくりと検査の効率化を図る予定です。検査システムの見直しなども行い、受診される方とスタッフ双方が満足できる体制をめざしています。他の医療機関や施設とのネットワークづくりなどを含め、多くの皆さまから信頼されるサービスを構築していきたいと思っています。

健診事業 施設健診・巡回健診)

健康診断

人間ドック、生活習慣病健診、特定健診

オプション検査

CT、胃内視鏡、頸動脈エコー、内臓脂肪、乳

がん、子宮がん、脳ドック、PET検査 など

健康相談

保健相談、栄養相談

保険診療

生活習慣病外来、再検査

主な特徴

ISO9001/14001認証(審査登録)

プライバシーマーク認定 など

[沿革]

1990年 1月 渓仁会円山クリニック開設

2001年 2月 ISO9001審査登録

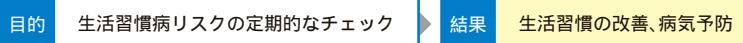
2004年 1月 ISO14001審査登録



渓仁会円山クリニック院長
道家 充



生活習慣病の予防をサポート [特定健診・特定保健指導]



当クリニックは開設時より、病気の早期発見や健康管理に主眼を置いた健診事業や、生活習慣病などの予防に取り組んできました。2008年4月から、特定健診・特定保健指導が始まったことで、当クリニックではこれまで積み重ねてきた検査や指導のノウハウを生かし、さまざまなサポートを行っています。

特定健診は40歳～74歳の方を対象に、糖尿病や高血圧症といった生活習慣病のリスクチェックのために、年に1回実施されます。この健診で生活習慣の改善の必要性があると判断された場合に行われるのが特定保健指導です。病気を引き起こす要因を要注意段階で改善するのが狙いのため、メタボリックシンドロームの予防と具体的な保健指導に重点が置かれています。

当クリニックでは、医師のほかに、保健指導や栄養指導などを担当する専任のスタッフが、一人ひとりに合わせた生活習慣改善のためのプログラムを作成し、継続的に

支援。食習慣や運動習慣改善を中心に、面談やメールでの指導などを行います。また、併設施設での運動プログラムの提供や、手稲渓仁会病院との提携など、病気を未然に防ぐためのサポートシステムが整っています。



皆さまの健康を守るために [検査体制の充実]



当クリニックは、健診事業に特化した医療機関として、最新の検査体制の整備に努めています。提供している検査としては、人間ドックや企業健診、札幌市民健診のほかに、器官や部位ごとのオプション検査、企業や地域に出向いて健診を行うなど、日常の健康管理から、病気の早期発見まで、受診される方の要望に沿った、幅広い検査項目を用意しています。

また、どの検査においても高い質の確保をめざしています。最新の検査設備の導入だけでなく、常にスタッフの技術や知識のレベルアップを図り、検査精度を向上させています。また、社会的ニーズなどを踏まえ、検査項目の定期的な見直しなどを実施。男女それぞれの必要検査項目に応じた「メンズドック」や「レディースドック」を設けるなど、検査体制を充実させています。

検査時の待ち時間の短縮や迅速な結果報告、過去の検査データに基づく検査内容のアドバイス、受診後のフォローの実施など、受診者に満足していただけるサービス体制にも留意しています。今後は、ハード・ソフト両面をさらに充実させる予定です。



健康づくりをより身近なものに [各種啓発活動]



近年は、健康づくりへの関心が高まる傾向にあり、食習慣や生活環境を改善しようという人が増えています。当クリニックは早期から、保健師や管理栄養士による保健・栄養相談、地域での保健指導、企業と提携したアドバイス事業など、健康な生活環境づくりに向けた活動にも取り組んできました。

現代の医療では「病気をいかに未然に防ぐか」が一つのテーマになっています。そのためにも、生活習慣の改善や定期的な健診によるチェックが不可欠です。当クリニックは地域での講習会や教室、運動指導などによって、幅広い年代の人たちが日常的に取り組める健康づくりを推進しています。

また、健康に対する意識啓発にも取り組んでいます。外部での各種講習会や指導に加えて、2004年より院内広報誌『えん』を発行し、生活習慣の改善方法や健康づくりの話題などを掲載。さらにポスターやパンフレットなどのツールによって、健診

の必要性や健康づくりの大切さを訴求しています。

より多くの方々に健康な生活への関心を持ってもらえるように、これからも指導や啓発活動を継続していきます。



エネルギー転換によるエコ効果 [環境保全の取り組み]



2004年に渓仁会グループ全体で環境マネジメントシステムであるISO14001の登録認証を行ったことをうけ、当クリニックでもCO₂の排出削減や環境への影響を低減する取り組みを行ってきました。なかでも大きな効果をあげたのが、エネルギー資源の転換でした。

当クリニックでは2006年から、冷暖房設備に使用するエネルギーを重油から天然ガス(都市ガス)へと転換を進め、2007年度に完全転換しました。天然ガスは重油よりも二酸化炭素排出係数が低く、環境にやさしいエネルギーとされています。また、道内のガス田で採掘されるクリーンなエネルギーとしても注目を集めています。この天然ガスへの転換によって、前年対比でグループ全体のCO₂排出量を大幅に削減することができました。

こうした大型省エネ設備の導入以外にも、水道使用量の削減や環境に配慮した事務用品の購入、車両燃料の使用量削減など、環境保全活動を継続的に行ってています。当

クリニックの全職員が環境保全への高い意識を共有し、業務内容の見直しや改善などによって、環境負荷の低減が実現できるように、組織内での啓発活動にも取り組んでいます。



「渓仁会円山クリニックの“これから”」

病気の早期発見・予防に努める健診施設である渓仁会円山クリニックは、2010年で開設20周年を迎えます。施設改修にあたり、ディズニーランドの精神から学び取ろうと、頭文字を取って名付けたDLプロジェクトを立ち上げました。プロジェクトリーダーとして改革を推進する塙なぎさ副院長を中心に、将来の展望を話し合いました。



渓仁会円山クリニック
副院長
塙 なぎさ



渓仁会円山クリニック
経営管理部 次長
山谷 明弘



渓仁会円山クリニック
放射線科主任
工藤 憲一



渓仁会円山クリニック
保健事業部課長
木村 礼子

「また来たい」と思われる健診を。 夢の国に学ぶプロジェクト開始

塙 DLプロジェクトはお客様主体で物事を考え、「またここで健診を受けたい」と思ってもらえる健診を行おうという気持ちから始まりました。健診を受けたお客様が納得できること、気持ちよい時間を過ごせること、それはディズニーランドに学ぶものがあると思い名付けました。具体的には6つの委員会を設け、全職員が関わる形にしています。

山谷 今回設置した委員会は、「人財育成」「アメニティ向上」「IT化推進」「広報活動」「外来運営」「施設管理」の6つの委員会です。

塙 各委員会は、トップダウンではなく職員全員でアイデアを出して、それを実現していくというものです。委員会を掛け持ちしている人もいますし、つながりを持った活動ができていると思いますよ。

工藤 私は施設管理と外来運営の委員を兼務しています。開設から20年経って、設備は随時変えてきてはいますが、当然お客様のニーズも変わりますのでそれに応える施設づくりが必要です。例えば検査に時間がかかるのは何よりの負担ですから、お客様の動線を考えたり、検査室のレイアウトを変えたりすることも必要です。

塙 外来については、「生活習慣病外来」を設けて、検査を受けた方が指導にも来るような、「線」としてつなげたいと考えています。

木村 健診で正常値から外れた人が、病気にならないようにご自身で生活改

善する、生活を見直す、そのフォローが私たち保健師の仕事です。健康に危機感を感じるタイミングは人それぞれですが、外来で折に触れ言い続けられれば、気付いていただくチャンスを増やすことができます。

塙 健診の結果は数値で出ます。でも、プロが見ればその人の生活が見えます。単に紙で数値だけを渡すのか、それとも改善点を指摘するのか。せっかく健診を受けていただくのだから、生活習慣を変えるチャンスですよね。ただし、当クリニックで健診を受ける人は年間30,000人、膨大なデータが蓄積します。的確に指導するには、相当ITの能力がないと外来が機能しません。

山谷 そうですね。外来がしっかりと機能するためには顧客・患者情報の管理が大切です。健診の情報を連動させることで、治療につないだり、精密検査が必要なときにスムーズに予約できるようにもできます。また、他の医療機関と情報共有することで、次回の健診や指導に活かせるメリットも出てきます。

単なる検査に終わらせず、 心が通い合うサービスをめざす。

塙 私たちの仕事は単純な医療・健診のサービスではなく、お客様の生活・仕事・家庭を第一にした、生き方を尊重するアドバイスでなければいけません。

木村 年1回の健診で、お客様に「また来たい」と思っていただくには感動していただくことが必要で、その感動は人とのつながりから生まれます。です

から、良いサービスを提供するには職員がきちんと成長していかなければなりません。“人財”、良い人材を育てるためにも、私達自身がこの職員でよかったですと思える風土づくりが大事だと思っています。

山谷 職員がやりがいを持って働くことが、良い仕事となってお客様へのサービスの向上につながります。私の部署は経営管理部ですが、すべての職員が働きやすい環境をつくる“環境調整部”だと思っています。

工藤 技師にとって、良いサービスとはスキルアップと時間短縮です。しかしそのためにハードを整えても、お客様は機械の新旧ではなく、検査員の言動や態度を見ています。スキルとは技・知識だけでなく、人格面が大切です。その指導は委員会だけでなく、科の中でも必要だと思います。

塙 お客様のご要望はそれぞれ違うので、相手が何を考え、何を望むか、心を読み取ることが必要です。それは人間としての関係を築くということ。そういう“血の通った指導”ができる施設でありたいですね。また、健診に来る方だけでなく、病気になるまで健康へのアドバイスを受ける機会がない人は地域にたくさんいます。皆さんに「自分の健康はどうなのか」ということを知りたがっています。一般的な知識だけでなく、そういうひとりひとりの問い合わせにも答えていく、地域への啓蒙も私たちの大切な仕事だと思います。まだまだこれからやらなければならないことはいっぱいですね。

社会福祉法人渓仁会

DATA

主な施設と事業

介護老人福祉施設 特別養護老人ホーム

西円山敬樹園

札幌市中央区円山西町4丁目3-20

x011-631-1021

地域密着型介護老人福祉施設

菊水こまちの郷

札幌市白石区菊水上町4条3丁目94-64

x011-811-8110

介護老人保健施設

コミュニティホーム白石

札幌市白石区本郷通3丁目南1-35

x011-864-5321

コミュニティホーム八雲

二海郡八雲町栄町13-1

x0137-65-2000

コミュニティホーム美唄

美唄市東5条南7丁目5-1

x0126-66-2001

コミュニティホーム岩内

岩内郡岩内町字野東69-26

x0135-62-3800

軽費老人ホーム(ケアハウス)

カームビル西円山

札幌市中央区円山西町4丁目3-21

x011-640-5500

その他

認知症対応型共同生活介護(グループホーム)・地域包括支援センター・介護予防センター・通所介護(デイサービス)・指定居宅介護支援事業所・訪問看護ステーション・訪問介護(ホームヘルパーステーション) など

[沿革] 主な施設の開設状況と法人の動き

1981年 12月 「社会福祉法人南静会」設立

1982年 4月 特別養護老人ホーム

「西円山敬樹園」開所

1989年 4月 老人保健施設「コミュニティ

ホーム白石」開所

1996年 4月 ケアハウス「カームビル西円

山」開所

1998年 4月 老人保健施設「コミュニティ

ホーム八雲」開所

2000年 4月 介護老人保健施設「コミュニ

ティホーム美唄」開所

2001年 1月 各施設ISO9001審査登録

開始

2004年 1月 ISO14001審査登録

(法人全体)

2006年 6月 プライバシーマーク取得

2007年 4月 介護老人保健施設「コミュニ

ティホーム岩内」開所

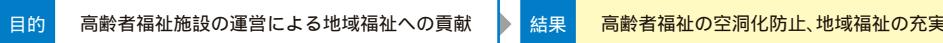
2009年 4月 法人名変更「社会福祉法人

渓仁会」

社会福祉法人渓仁会理事長
谷内 好



地域の福祉を支えていくために……[高齢者福祉サービスの拡充]



社会の高齢化が急速に進むなか、高齢者の福祉の拡充が急務とされています。特に高齢化率の高い北海道では、医療や福祉サービスを必要とする方がいても、施設不足などから満足なケアが受けられない、という地域もあります。社会福祉法人渓仁会では、そうした地方からの要請に応え、地域に密着した福祉施設の運営にも取り組んできました。

地方で最初に運営に取り組んだのが、1998年4月開設



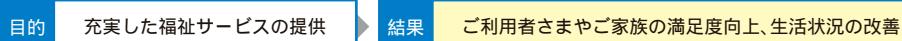
の介護老人保健施設「コミュニティホーム八雲」でした。住み慣れた地域で暮らしながら、家庭生活への復帰をお手伝いす



る施設として、八雲町やその周辺部の皆さんにご利用いただいている。続いて2000年には美唄市に「コミュニティホーム美唄」、2007年には岩内町に「コミュニティホーム岩内」を開設。それぞれ入所機能に加えて、デイケアやショートステイも提供しています。

こうした施設は、地域における高齢者福祉の拠点としての役割も担っています。地方においても質の高い福祉サービスを実現できるように、ご利用者さまやそのご家族、地域の人々と手を取り合いながら、地域特性も考慮したケアの実現をめざしています。

ご利用者さまの笑顔とともに……[先進的な福祉サービスへの取り組み]



社会福祉法人渓仁会では、ご利用者さまに喜ばれ、満足していただける福祉サービスのあり方を追求してきました。新しい施設の開設や設備の導入、工夫をこらしたイベントやリハビリ活動など、常にご利用者さまにとってプラスになるサービスを考え、提供しています。そうした取り組み例の一つが、2007年7月に開設した「菊水こまちの郷」です。

「菊水こまちの郷」は、2006年の介護保険制度の改正に

より始まった地域密着型サービスに基づく施設として、札幌市で初めて開設されました。入居定員29名の地域密着型介護老人福祉施設と、「通い」を中心に「宿泊」や「訪問」などのサービスを必要に応じて提供する小規模多機能型居宅介護の機能を併せ持つ、新しい施設として注目を集めました。

介護予防のための「パワーリハビリ」の導入や、懐かしい生活用品を使った「回想法的リハビリ」の実施など、ご利用者さまのニーズや効果を見据えながら、新しいサービスの提供も行っています。人間性あふれる温かな福祉サービスを目標に、組織全体でこうした活動に取り組んでいます。



自然エネルギーの有効活用 ……[コミュニティホーム美唄の雪冷房システム]



美唄市で初めての介護老人保健施設として2000年4月からサービスを開始した「コムニティホーム美唄」では、雪氷冷熱エネルギーを活用した「雪冷房システム」を導入しています。美唄市は積雪が多く、街づくり事業の一環として冬期間に降り積もった雪を貯蔵して活用する「利雪」事業に取り組んでいました。「コムニティホーム美唄」でも、開設時からこのシステムを取り入れ、環境に配慮した施設運営を行っています。

「コムニティホーム美唄」は、約300トンの雪を冬期間に建物内の貯雪庫に貯蔵し、暑さが厳しくなる7月中旬から8月中旬にかけて、雪の冷熱エネルギーを雪冷房として利用。通所者デイルーム、機能訓練室、事務室などに冷風を送り、快適な環境づくりを図っています。このシステムによって、CO₂の排出量を大幅に低減できるほか、電気代や冬期の排雪費用の



削減にも役立っています。

この取り組みは、「平成14年度第7回新エネ大賞」新エネルギー財団会長賞を受賞するなど、高い評価を受けました。クリーンエネルギーである雪を活用した、人と環境にやさしい施設として高い関心が寄せられています。

皆さまの声に耳を傾けて …… [アンケートの実施]



各施設・事業所では、ご利用者さまやご家族からのご意見を把握するために、定期的にアンケートによる満足度調査を行っています。内容は、施設でのサービスや職員の対応についての評価、苦情や相談に関する質問、総合的な評価など。自由回答のご意見欄も設け、率直なご意見やご感想、ご要望などをお寄せいただけるようにしています。

調査の結果は、提供するサービスや環境の見直し、職員の意識改善などに役立てています。また、結果を皆さんに

公表し、課題や今後の取り組みを明らかにすることで、信頼される組織づくりに努めています。

アンケート調査以外にも、隨時皆さんからのご意見やご質問



をお寄せいただくための投書箱を設置しています。いただいたご意見は定期的に協議・検討を行い、具体的な対策を講じるなど、業務改善につなげています。

皆さんからのご意見は、たいへん貴重なものとして、全職員が真摯に受けとめています。渓仁会グループが掲げる「安心と満足の提供」という事業理念を実現するためには、これから多くの方々のご意見に耳を傾け、喜ばれるサービスの提供に努めていきます。

「未来へと続く、高齢者福祉をめざして」

- 地域社会に貢献する福祉法人として -

超高齢社会の日本において、高齢者福祉は重要課題の一つとされています。社会福祉法人済仁会は、1982年の西円山敬樹園開所以来、特に高齢者福祉において幅広いサービス展開を行ってきました。機能の異なる4つの施設の職員が、それぞれの取り組みについて、課題や展望を交えて話し合います。



介護老人福祉施設
西円山敬樹園
施設ケア部生活支援課
統括主任
田村みか



介護老人保健施設
コミュニティホーム白石
副主任
佐々木 貴紀



あおばデイサービス
センター
主任
佐藤 貴久



小規模多機能型居宅介護
菊水こまちの郷
主任
池端 宏介

時代とニーズに添った 高齢者福祉のあり方。

田村 西円山敬樹園は、日常生活に介助が必要な方がご利用される、いわゆる特別養護老人ホームです。隣接する札幌西円山病院との連携ができているため、安心されるご家族が多いようです。また、私たち職員にとっても、医療との連携は心強く、安心してケアを提供できます。

佐々木 コミュニティホーム白石は、介護老人保健施設の先駆けとして、1989年に開所しました。特徴は、白石区の中心部にある都市型であることと、医療機関などの併設がない単独型という点です。

佐藤 1999年開設のあおばデイサービスセンターは、厚別区全域にお住まいの方を対象に、通所でのサービスを提供しています。午前中は主に入浴を、午後は体操やゲームなどを実施して、一日楽しく過ごしていただけるように工夫しています。

池端 2年前に開所した菊水こまちの郷は、新しい制度の枠組みから生まれた施設で（43ページ参照）。小規模多機能型施設の方では、イベントや趣味活動などの通所サービスを中心に、必要に応じて訪問や宿泊を行っています。

田村 最近の傾向は、入所されてから、病状の悪化などで病院に入院される方が増えていることです。以前より入所期間は短くなっています。また、必死の思いで介護されてきたご家族が、私どもの施設をご利用されることで「救われた」「安心した」と言われることも多くなっています。

佐々木 ほっとされるご家族は多いですね。介護老人保健施設では、なるべく早く在宅ケアに移っていただくのが理想です。

でも、ご家族が面倒を見られず、切羽詰まるケースも増えています。現在は所定の入所期間に細かい取り決めではなく、必要な限りケアをしていく体制になっています。

池端 ご家族がお仕事の都合などで、施設の送迎時間に合わないこともあります。そのため当施設では、家族送迎の場合は、受け入れ時間を制限せず、朝から夜までご利用いただけるようにしています。

佐藤 暮らし方や家族のあり方も変化しています。ご家族に負担がかからないようにショートステイを紹介したり、送迎の際の様子などで気になることがあれば、何らかの対応をするように心がけています。

地域の福祉のために 私たちがめざすこと。

池端 入所を希望される方はたくさんいるのに、施設数が足りていないという問題があります。当施設だけでも、入所待機者が150名を超えています。ショートステイも一時しのぎであって、ご家族の悩みの根本的な解決にならないのが実状です。

田村 高齢者福祉は、多くの問題を抱えています。介護職員の不足もその一つです。当施設では、3年前から介護職の養成にプリセプター制度を取り入れ、技術面と精神面をフォローする体制にしたところ、職員の定着率が高まりました。

佐藤 スタッフの定着率やスキルのレベルは、ケアの質に直結します。最近は、別の業界から転職してくる人も増えています。そうしたスタッフをどう教育し、やる気を引き出すかというのは共通の課題ですね。

佐々木 最近では個室型の施設も増え、ユニットケアへと移行してきています。そ

うした施設をうらやましい、と思うこともあります、従来型施設の良さもあります。いろいろな職種が連携しあう大規模多機能型のメリットを生かしたいですね。

田村 同様に、従来型の施設では集団行動が多く、なかなか個別ケアに応えられないというジレンマがあります。

佐藤 デイサービスは、ご利用者さまに笑顔で帰っていただくことが目標です。日中はあわただしくなりがちですが、職員みんなで力を合わせ、サービスの質を高めていきたいと考えています。

池端 満足いただくケアには、信頼関係が大切ですが、親しみとなれ合いは違います。当施設ではKS Y(こまちのサービスを良くしよう)委員会をつくり、電話対応などを含め、接遇面の改善を図っています。

田村 西円山敬樹園ではこれまで、ご家族と懇談する機会をあまり持てませんでした。これを見直し、3年前からは年に1度、ご家族との懇親会を開催しています。直接、ご家族の本音をうかがい、施設とご家族が協力しあえる環境をめざしています。

佐々木 ここ数年、ご利用者さまの傾向もだいぶ変わりました。携帯電話やインターネットの使用など、通常の生活の感覚を施設にも求められるケースが増えています。制限はありますが、柔軟に対応できることはないか、考えていこうと思っています。

プリセプター制度
看護師の養成において採用してきたシステムで、新人の担当指導者として先輩職員が付き、一定の期間、教育を行うこと。

溪仁会グループを取り巻く方々との対話 より良い関係をつくる 情報コミュニケーションを考える

溪仁会グループでは、地域の皆さまからのご意見、ご提案をいただく場として「ステークホルダー・ダイアログ」を定期的に開催しています。今回はコミュニケーションをより深化させることをめざし、地域の中核的な医療を担う手稲溪仁会病院の施設見学と合わせて開催いたしました。今後も引き続き、皆さまとの対話の場を設け、当グループの事業運営に反映していきたいと考えております。

30年のあゆみ

組織一覧

この道をひらく

わたしたちのCSR

ステークホルダーとの対話

環境報告

トップメッセージ

[出席者プロフィール]



樋口 哲雄さん
手稲溪仁会医療センター
地域協議会会長

地域住民10名、手稲溪仁会病院の職員10名で構成される地域協議会会長として精力的な活動を行っている。地域住民、患者さま、利用者さまからのさまざまな要望を受け入れ、病院側に提言・改善を図る。



明田川 知美さん
北海道大学大学院教育学院
博士課程

夫と3人の子どもの5人家族。子育てしながら大学院で勉強中。専攻は教育行政学、乳幼児施設のリスクマネジメント。三女がNICUに入院したことをきっかけに札幌市的小児医療のあり方に関心をもつ。



宮岸 和子さん
NPO法人シーズネット会員

高齢者のさまざまなサポート事業を行なうシーズネット会員。現在は同会の「安心ネット」(孤独死予防の電話による安否確認)の活動、シニア対応賃貸マンション(北区)で週1回のサロン運営などに関わっている。



下村 笑子さん
札幌認知症の人と家族の会
副会長

中立な立場で、評議員として社会福祉法人溪仁会に関わる。また、「札幌認知症の人と家族の会」の副会長として、研修会などを通じて認知症への理解促進に取り組む。



**司会
伊藤 一さん**
小樽商科大学商学部教授

マーケティング論、流通システム論が専門。医療トップマネジメントにも造詣が深く、溪仁会グループCSRレポートでは「第三者意見」を2年間にわたり担当。

手稲溪仁会病院における施設見学概要

初めに、ヘリポートで待機していた救急医療専用ヘリコプター(ドクターヘリ)を見学しました。要請からわずか数分で離陸するという機体を目の前に、参加者からは機内の装備や出動までの体制、出動実績などについて質問が出されました。

その後、手稲溪仁会クリニックおよび救命救急センターを見学し、それぞれの施設が担っている役割、診療システムの基本的な方針等について理解を深めました。



※インフルエンザ対策のため、ご参加いただいた皆さんにはマスクをつけていただき施設見学を行いました。

*施設見学および座談会は、2009年10月10日に開催いたしました。

その病院・施設の“役割”について 理解している人はまだ少ない

伊藤 医療や保健、福祉の分野におけるコミュニケーション向上の必要性はますます高まっています。それぞれのお立場から、済仁会グループの医療への取り組み内容や活動について、患者・利用者、あるいは地域社会に対して「もっとこんなふうにアピールしたらいいのに、こんなことを伝えたらいいのに」と思う点について自由なご意見をいただきたいと思います。

下村 私は、今日見学させいただいた手稲済仁会病院と同じ町内会に住んでいる者で、この病院が建つ前からの住民です。手稲済仁会病院は、今は急性期の総合病院、救急救命の病院として地域住民に浸透してきましたが、開設したばかりのころはまだ患者さんも少なかったので地域の住民も利用しやすく、誰でも受け入れてもらえた時期がありました。当時のことを覚えている高齢者にとっては、なかなかそことの切り替えが難しくて、期待と違ったという意見も時々聞きます。

伊藤 地域の方々にとって、日常的な病気の診察をしてもらえる病院としての役割を期待していたということですね。

下村 良い病院ができたから、みんなの「かかりつけ医」になってほしいという願いがあったと思います。いつでも歩いて行ける、顔を合わせて診療していただいて、またいつでもいらっしゃいという信頼関係のある町医者を期待した人も多いです。そういう人にとっては、病院が急性期や高度救急という使命を担ってくるようになると、敷居が高い、期待と違ったということになると思います。なぜ大きな病院との使い分けが必要なのか、町医者との連携、つなぎをもつと利用者に伝えてくださったらしいのかなと思っています。

樋口 私は手稲済仁会医療センター地域協議会を立ち上げて14年になります。地域住民の協力を得なければならぬことがありますので、住民の声を聞いたらそれを即座に済仁会にお伝えして、改善してもらう。こういう形でともに歩んできました。ですからよくわかるのですが、医療連携やかかりつけ医について理解していない人もたくさんいます。これが、誤解を生む最大の悩みです。「ここの病院に来たのに、なぜ途中で投げ出されるんだ」とか「ここでは診てくれない」。そういう誤解が生まれています。「なんだ、俺はここを選んで来たのに」という感情が先にあるものだから、先生や看護

師さんがいくら説明してもなかなか理解できない。苦労しているのはそこだと思います。病院にしても、福祉施設にても、それぞれの機能なりがもっと理解されるといいんですが。

宮岸 自分の住んでいるところに病院があるというのはとても安心なことです。手稲済仁会病院には何度か外来でお世話をしていますが、これだけいろいろ役割を持った施設があることを知りませんでした。インターネットで検索してみましたら、健診施設ですとか長期療養の病院、生活支援の施設など、ほんとうにたくさんの病院や施設があって驚きました。地元にある病院のことを私はもう少しそく知るべきだったと思っております。

明田川 私は札幌に32年間住んでいますが、私自身は済仁会にかかったことはなくて、母が腰痛で診療してもらったとか、それぐらいの関わりです。ただ、医療に関しては一市民として関心があります。先ほど病院内を見学させていただいたことはすごく良い機会になりました。もっと私たち自身が地域の中で情報を得ていこうとすることが、医療機関や福祉施設との信頼をつくることにつながるのかなと思います。

樋口 私たち協議会でも利用者とよく話しているんですが、患者としての賢いかかり方は必要です。私は、知っておかなければならない重点的なことを1冊にまとめて持って歩いて、患者さんや利用者さんに誤解や問題が起きた時に説明しています。そうすると皆さん、「あっ、そうなんだ」ということで理解していただけます。提供する側も、利用する側も、お互いに理解しあって納得してかかることが大事です。

相互理解を深めるためには、 もう一歩すすんだアプローチが必要

伊藤 済仁会グループでは、「CSRレポート」や「サラネット」(広報誌)など、さまざまな形式で情報を提供しています。現状としてはそれらの方法で伝えきれていないことが課題でしょうか。

宮岸 私は、1、2度広報誌を手にしましたが、済仁会グループを利用したことがない方はなかなか入手できませんよね。もう少し広く、地域全体で周知できる方法があればいいかなと思います。

明田川 私は子どもが3人おりますので、小児3次救急をこちらでされているということで親としてはとても心強く思っています。

渓仁会グループを取り巻く方々との対話
より良い関係をつくる
情報コミュニケーションを考える



治療方針にしても子どもの体に負担をかけない治療などを工夫されていますよね。渓仁会グループでどんな取り組みをされているのかを、子育てをしているお母さんたちにもっと知ってもらう機会があればいいですね。

樋口 一番いいのは、住民組織を活用することだと思います。いろいろな住民組織の人たちに実際に見てもらう。知つてもらう。そこから始めていかないと、いくら立派なものがあっても留まってしまうことがあります。住民であれば、「あそこに建っているのはどんなところだ?」から会話が始まって、地域全体に広まっていく、そういう効果があります。

伊藤 コミュニケーションする際の情報収集に住民組織の力を活用する、情報を提供する場合も同じように地域の人を見てもらって、「こういう病院・施設ができているぞ」という話をしてもらえば住民が納得しやすいということですね。広報誌などでピーアールするのも一つですが、地域のボランティアの方々を中心に入れて、患者さんや利用者さんと同じような目線でピーアールするのも一つの方法ですね。

下村 人は必要に迫られると興味を持ちます。ですから、例えばお薬の袋の中に予防に関するアドバイスを入れてあげたり、領収証と一緒に「自分たちの病院は特にこういう方のための施設です」というピーアールを入れたり、直接患者さんや利用者さんに手渡すものと一緒に配る方法もありますね。そういうことで啓発していくのがいいのかなと思います。パンフレットを持ち帰ってもらうだけではなくて、その次のステップとして、良いアドバイスがあったらいいなと思います。

樋口 渓仁会グループは一つだけの病院ではないですし、法人本部もあります。民間の会社であれば本社、支社という考え方方がすぐわかりますが、渓仁会の場合は、法人があって、病院・施設があって、さらにそれぞれに独自の機能や考え方を持った施設があります。それぞれが連携するシステムがあるから安心だということを伝えていけばいいと思います。各病院の現場でそれを伝えるには限界がありますから、グループ全体としてバックアップした方がいいと思います。

それから、渓仁会には、地域の医療機関の先生がたとの連携をすすめていく地域連携福祉センターがあります。私はそれをもっとピーアールすべきだと思っています。連携している病院がたくさんありますから、それを広めることができれば「あっ、この病院うちの近くだ」と思ってもらえます。大きな病院との使い分けを知ることにつながると思います。

安心や信頼を生むコミュニケーション
のために期待すること

伊藤 医療や福祉のサービス、施設や設備などの面で、患者や利用者が求めることには一人ひとりの異なったニーズがあると思います。皆さんが願う医療や福祉のサービスについてご意見をお聞かせください。

宮岸 渓仁会さんでは若い先生がたの研修に力を入れていらっしゃるということで、それは大事なことだと思いますが、若い方は実際に高齢になった時のことが体験できていないわけですから、少々ご年配の先生がいらして老人の医療に携わっていただけたらいいなという思いがあります。

下村 医療費についてですが、実は後期高齢の患者の中には、医療費のことがわからなくて不安だという声があります。こういう検査には後期高齢者の場合はこれだけの費用がかかりますという説明が欲しいなと思います。医療費は払った後はわかりますが、払うまでわかりません。

樋口 不要な検査などはないと思いますが、支払いの後であれば領収書を必ず見る習慣をつけることも患者として必要



です。自分が思っていた金額より高額だったら、その場で聞くというのもいいと思います。検査の仕方、内容によって違つてきますから、私は聞くようにしています。

下村 事前に知ることができればいいと思うんですね。例えば歯科であれば、「今度、こういう歯を入れますからいくらぐらいかかりますよ」と、あらかじめ言ってくださる先生がいます。そのようなことが他の医療にもあれば、予算を知ることができます。商品を買うこととは違うとは思いますが、医療の分野でもあらかじめ胃カメラはこれくらいとか、入院費はいくらくらいとか、そういった目安になる一覧表があれば良いなと思うことがあります。

明田川 私は、渓仁会グループがISO9001を取得されていることにすごく興味を感じています。画一化ではなくて、高い品質を維持したり向上させることを目指した標準化や規格化という意味で、すべてのスタッフが専門性を發揮できる可能性があると思っています。

樋口 医師や看護師さんもそうですが、忘れてならないのは裏方さんです。お掃除をする人、給食の人、病院全体が一体となった接遇をやらないとダメですね。チームとして対応できるかどうかです。どこが欠けても、サービスというのはマイナスになります。どんな立派な先生がいても、看護師さんがいても、設備があっても。その点、渓仁会はものすごく親切で、患者さん

の立場に立って、話をよく聞いてくれます。職員みんなの連携がすごいなと思っています。これは「よいしょ」ではありませんよ。

明田川 ここで皆さんのお話を聞いて渓仁会グループへの信頼度がすごく強くなったと感じます。病院側から提供されるたくさんの資料を熟読するよりも、関心を持っている地域の方、住民の立場として発信される声を聞くことの方が、自分のなかでの納得度が高まるのだとすごく思います。

私も家に帰ったら、夫に伝えようと思うことがたくさんあったのですが、きっと人伝えというか、直接見てきた人、聞いてきた人からここが良かったとか、感銘を受けたということを聞くのが一番心に入りやすいのかなと、しみじみ思いました。やっぱり、もっと私たち自身が地域の中で語り合っていくこと、そういう医療や福祉機関と地域ぐるみで関係を持っていくことがコミュニケーションを深めていくことにつながるのかなと感じています。

伊藤 今回のステークホルダー・ダイアログでは、情報発信というコミュニケーションのあり方についてのご意見が多かったように思います。情報の受発信の困難さはコミュニケーションの障害に直結します。より良いコミュニケーションのために今後どのように情報を受発信していくのか、改善を加える意味で貴重なご意見をいただいたのではないかと思います。みなさんありがとうございました。



人に、環境に、やさしい経営をめざして

渓仁会グループは、2004年にISO14001（環境マネジメントシステム）への登録申請を行い、環境問題への取り組みを強化してきました。各施設においても、職員および地域社会の環境意識向上をめざし、独自の環境保全活動を展開しています。ここでは、この1年間の特徴的な活動内容について報告します。

広がる環境保全への取り組み「おたるドリームビーチ清掃活動」

渓仁会グループでは、職員による地域貢献の一環として、「渓仁会グループ環境活動」を実施しています。2008・2009年度で計4回にわって、グループ職員と家族の参加による「おたるドリームビーチ清掃活動」を実施しました。清掃エリアは、小樽市錢函3丁目のおたるドリームビーチ東側の約1.2キロメートル。回収したごみは、一般ごみ、木枝等の漂流物のほか、家電やタイヤといった不法投棄物もみられました。渓仁会グループは、『環境保全は、継続して取り組むことが大切である』と考え、清掃活動の定期的な実施や他のエコ活動など、より多くの皆さんに参加していただける環境活動を行っていきます。



リングプル収集活動で車いすを寄贈

渓仁会グループの各病院・施設では、缶ジュースの飲み口についているリングプルの収集活動を2008年3月から行っています。「リングプル再生ネットワーク（ブルネット）」に登録し、リングプルを一定量収集してブルネット事務局へ送り、車いすと交換し、車いすを必要としている地域の公共施設へ寄贈し地域貢献することを目的にしています。

各施設の患者さま、ご利用者さま、そのご家族、地域住民の方などによる多くの協力をいただき、2009年8月までに車いす1台分にあたる660キログラムを収集することができました（収集期間 1年6ヶ月）。リングプルと交換した車いすは、公共施設に寄贈される予定です。



渓仁会エコの日プロジェクトをすすめています

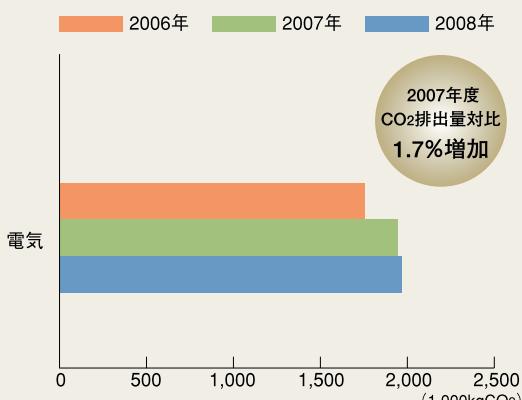
環境活動の効果としてCO₂排出量の削減が挙げられますが、職員自身の日常活動の成果としては、なかなか成果が見えにくいことも事実です。これまでの活動からそう感じてきた私たちは、今年度から「エコの日プロジェクト」と題し、日常の努力の「見える化」を目指しました。この活動は「同じ日にグループ全施設で同じ環境活動」を行うというもので、内容も日常業務の中でできることを選定します。第1弾は「Noコピーデー」として、1日できる限りコピー機を使用しない活動を行いました。今後も「日常の中でできることを、みんなで継続する」というスタイルで盛り上げていきたいと考えます。

渓仁会グループの環境パフォーマンス

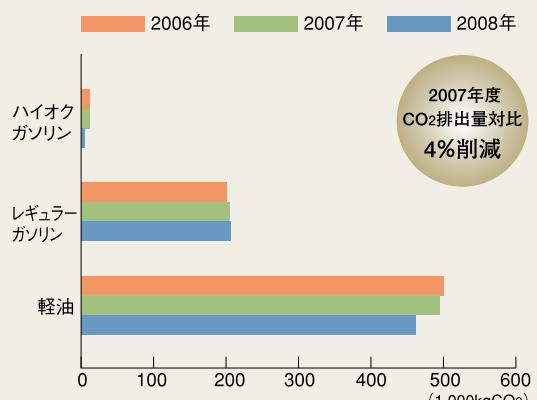
渓仁会グループが取り組むさまざまな環境活動において、その成果の指針となっているのが資源の利用に対してどれくらいの環境負荷があるのかを集積し、CO₂換算によって数値で示した環境パフォーマンスです。2008年度は、前年度対比-7.4%となり、各施設の省エネ活動の定着がみられました。

年度別環境管理データ比較

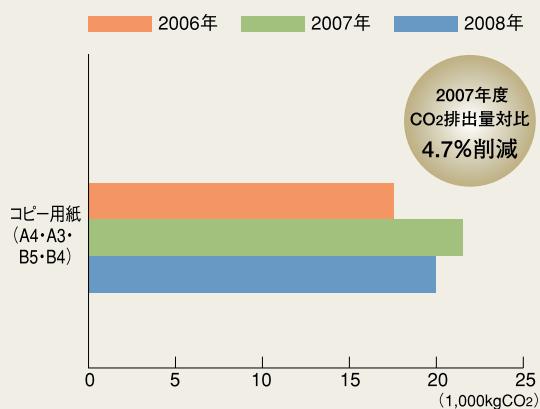
■ 電気(CO₂換算)



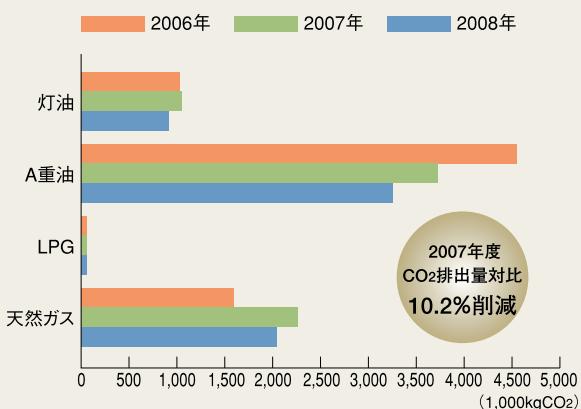
■ 車両燃料(CO₂換算)



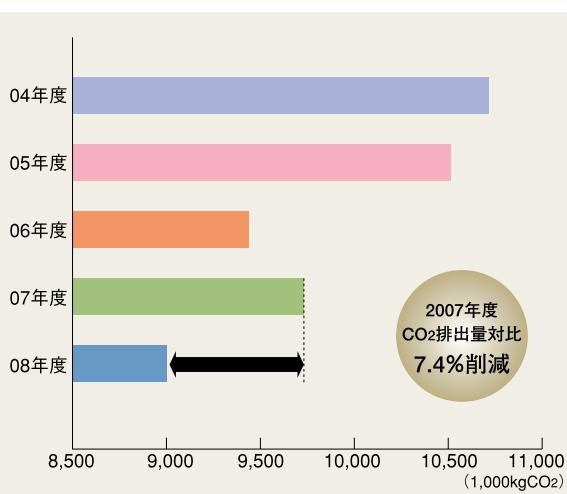
■ コピー用紙(CO₂換算)



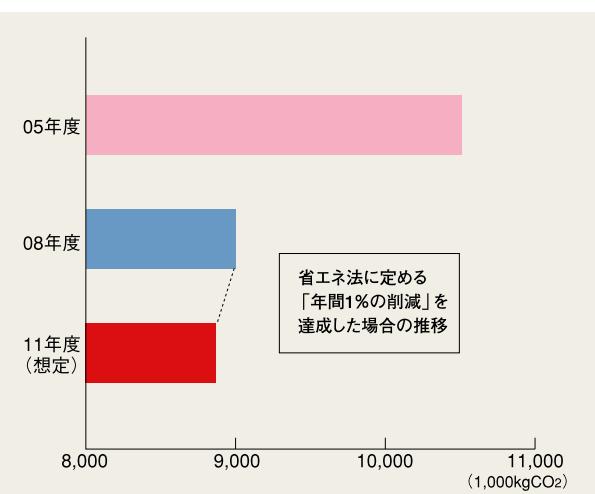
■ 建物設備維持燃料(CO₂換算)



二酸化炭素排出量の推移(過去5年間)



3年ごとの二酸化炭素排出量の推移



Top Message

トップメッセージ



済仁会グループの明日へ向けて。

済仁会グループ最高責任者
医療法人済仁会 理事長

秋野 豊明

30周年を迎えての感謝

済仁会グループは1979年の発足以来、確実に成長発展を遂げてきました。一般に、一つの組織・企業が社会に認知される年数が30年といわれますので、重みのある年月と思います。この歴史は職員の努力の成果です。そしてもちろん、今の発展には地域の皆さまの支えが欠かせませんでした。まずは職員と地域の皆さまに感謝を申し上げます。

30周年を迎えるにあたり、済仁会グループは職員の結束を図ることをめざした事業を主に行いました。一つは、済仁会健保組合の設立です。職員とその家族の健康を管理・増進することに対し、独自の活動ができるようになりました。次に、「社会福祉法人南静会」を「社会福祉法人済仁会」へと名称変更いたしました。済仁会ブランドに統一することで、医療と福祉の連携をご利用者さまにご理解いただき、安心を深くしていただきたいと願っています。

三つめに、ローカルな施設だった西円山病院に全国的なご理解が得られるよう、「札幌西円山病院」に名称変更しました。そして四つめが、手稲家庭医療クリニックの設立です。これから日本は在宅の医療・福祉が重要になり、地域に密着して在宅の医療を推進する家庭医が必要となります。しかしながら医師育成を担っている大学の医学教育では家庭医の専門医育成は難しいため、第一線の私たちがその役割を担おうと決意いたしました。今まで、これからも、質の高い安全な医療・介護を地域に提供し、私たちの社会的責任を果たしていくことを、新たに30周年の決意として掲げたいと思います。

「多数精銳」の人材育成

医療の質の向上に一番欠かせないのが「人財育成」です。人材の“ザイ”を財産の“財”で表し、人は財産であるというのが私たちの基本姿勢です。

今の医療や福祉はきめ細かいサービスが必要とされます。一般企業は少数精銳で業績を上げますが、医療や介護福祉では「多数精銳」、人手はたくさん必要で、かつその一人一人が精銳にならなければいけません。



精銳をつくるために大事なのは研修です。渓仁会には業務研修、職種別研修のほか、法人本部主催の研修があります。グループ全体に共通する課題について、階層別や年代別に分けて1回50人程度の単位でさまざまな研修を行います。職員は業務を離れて1日費やして研修し、自分の生き方を見つめ直す貴重な機会になります。毎年参加者が増え、今では3,600人の職員のうち、1年間で延べ1,000人が参加します。私も毎回出席して、皆さんを激励することにしています。

職員が力を発揮するために、やりがいを持って働く職場環境をどうつくるかという難しい問題があります。働きやすい環境をつくるため、札幌西円山病院にピッコロ保育園をつくりました。また、有給休暇の取得、残業を減らすこと、ワークライフバランス(仕事と生活の調和)を職員にお願いしています。

地域医療の中核をめざして

医療は今、病院に収容する医療から在宅の医療へ、患者さまを「待つ医療」から「出かける医療」へと大きく変化しています。国の医療計画として、医療機関の機能分化、つまり急性期は在院期間を短縮して亜急性期、慢性期につなぎ、さらに次の施設や在宅へつなげることや、各施設が特徴ある医療を提供することが求められています。

その中で大切なのは、他の医療機関と私たちが情報を共有し、地域内で連携してサービスを行うことです。手稲渓仁会病院では地域連携福祉センターを設立し、193の提携病院がそれぞれの得意分野を生かしながら、私たちと連携して患者さまの治療・ケアに当たる体制をつくりました。具体的には地域連携クリニカルパス(詳しくは28ページ)を作り、各病院が何をどこまで担当するかという診療計画の流れを患者さまと医療機関が共有しています。患者さまにとっても、効率的で的確なケアにつながります。

地域連携では、IT、いわゆるネットワークシステムを使った医療連携システムの必要性も増しています。今は手稲渓仁会病院を中心に、いくつかの提携病院との間で、双方向で画像診断を検討する連携システムがあります。さらに、総務省が主管するユビキタス事業として、後志地区のITによる医療ネットワーク事業が認められました。この事業においても手

稲渓仁会病院が中心的な役割を担うことになりますので、後志地区の医療機関の皆さまとの連携がさらに深まっていくことになります。連携体制の確立は、全体的な地域医療のコミュニケーションを促進しますので、私たちが中心的な役割を担うことは社会的責任であると思っています。

日本一のグループになるために

渓仁会グループが発展を続けるためには、乗り越えるべき課題がいくつかあります。まず、組織と個人のめざすものを一致させることです。医療人は職務的な使命感や誇りが強く、一生懸命な方ばかりですが、そこから組織に対するロイヤリティ(賛同)が生まれると組織が大きく飛躍します。それが経営の力であり、これをいかに高めるかが大きな課題です。

また、私たちの医療・保健・福祉の事業体は、理念は共有していてもそれぞれの病院・施設は自主自立しています。その一つ一つが力をつけると同時に、全体が連携の輪をつくることで、札幌全体を巻き込んだ地域づくりに貢献したいと考えます。

もう一つ、日本の医療は土日と祝日に休みますが、患者さまの病気に休日はありません。将来の夢として、患者さまのためというならば、私たちは365日医療をするべきです。今年も手稲渓仁会病院は、連休に当たる土曜日は平日と同じ勤務しました。もちろん、ワークシェアリングをして、労働過剰になるのは防ぎます。病気は時を選びませんから、それに応えるのが私たちの仕事です。

渓仁会グループは日本を代表する医療・保健・福祉の総合事業体をめざしたいと思います。日本一とは、数ではなく質のいいものを提供することで、私たちがモデルになる、先陣を切る仕事をしていきたいと思います。そのためには総合力を持った専門家の集団を作らなければいけません。将来は、渓仁会グループの新しい病院や施設を支える“多数精銳”を、私たち自身が大学やメディカルスクールを作ることで育成する必要があると考えます。それができてこそ、日本をリードするグループになれると思っています。

今後とも、渓仁会グループの活動に一層のご理解を賜りますようお願い申し上げます。

第三 者 意 見



東京交通短期大学 学長

田中 宏司 (たなか ひろじ)様

東京交通短期大学学長・教授
経営倫理実践研究センター理事・首席研究員、
日本経営倫理学会副会長、経済産業省・日
本規格協会「ISO/SR国内委員会」委員等を
務める。著書に『コンプライアンス経営【新版】』
（生産性出版、2005年）、『CSRの基礎知識』
（日本規格協会、2005年）、『実践!コンプライ
アンス』（PHP出版、2009年）、『CSRハンド
ブック』（監修、PHP出版、2009年）など。

『渓仁会グループCSRレポート2009』は、2006年以来第4回目の発行となる。前年度は、4つの事業理念を中核にしてCSR活動をまとめている。今回のレポートは、渓仁会グループの創立30周年にあたることから、原点にある志、理念を改めて見直し、さらなる未来への持続的な発展を目指して、「社会的責任30年の歩み」を特別企画として巻頭に掲げている。

当グループの30年の歩みを見みると、草創（1979～1984年）、改組（1985～1989年）、拡大（1990～1999年）、挑戦（2000～2003年）、変革（2004～2005年）、宣言（2006～future）と6区分して特徴を整理している。このような原点を見直す姿勢は、現在のグループで働く一人ひとりのCSR活動の基盤となると確信する。

また本レポートは、グループの重要なテーマについて、活動の担い手として“職員がどのような思いや姿勢で取り組んでいるか”について、“現場の声”をドキュメンタリータッチで紹介している。現場における医師や介護福祉士、フライナースなどの働く姿は、充実して美しい。さらに、当グループの先輩からのメッセージやステークホルダーミーティングを通じて、内外の関係者との意見交換を行い、“ステークホルダーの尊重”に格別の配慮をしている。一方、社会への重要な情報開示として、病院・施設ごとの概要・活動の説明、職員紹介なども行っている。

理事長秋野豊明氏のトップメッセージ「渓仁会グループの明日へ向けて」は、本報告のまとめとして、掉尾を飾っている。本レポートは、地域医療の中核として保健・医療・福祉の分野で活動する機関としての特色を、見事に浮き彫りにしており極めて優れていると高く評価する。

今後、当グループがさらに未来に向けて持続的に発展するために、留意すべき点を挙げると次の通りである。

第1は、2010年9月に発行予定の国際的な社会的責任規格ISO26000への対応である。

この規格は、あらゆる国、地域における企業のほか病院、大学、地方自治体、NGO/NPOなどあらゆる組織を対象としている。ガイダンス規格であり、第三者認証を目的としないが、当グループとしても、規格に盛り込まれている組織が取り組むべき7つの中核主題（組織統治、人権、労働慣行、環境、公正な事業慣行、消費者課題、コミュニティ参画及び開発）について、改めて実態を見直し本業に根ざした自主的取組を期待したい。

第2は、当グループとして年度の重点目標・計画については、“実践実績、自己評価、次年度への課題”的視点からの総括があると、社会からの信頼が一段と高まると考えられる。

渓仁会グループのCSR活動は、着実に成果を上げている。今後とも一人ひとりがグループの事業理念、ミッション、サービス憲章と行動基準などに基づき、地域から信頼され、保健・医療・福祉の分野で重要なテーマに誠実に取り組まれることを期待する。

1979年に西円山の地に老人専門病院を開設して30年、激動の時代を乗り越え2009年、渓仁会グループは30周年を迎えることができました。

第4号となるCSRレポート2009は、「社会的責任30年の歩み」をテーマに私たちの30年の歩みに焦点をあてて構成しました。現在、30年前には生まれてもいなかった職員も多く働いています。温故知新、この機会に私たちが「親切 丁寧 敬愛」(札幌西円山病院院訓・1979年制定)の灯を高く掲げて歩みだした社会的責任のミッションを振り返ることは、グループの明日への更なる飛躍に結びつくに違ひありません。

そのように歩んできた私たちの拠って立つところはプロフェッショナルマインドです。特集「この道をひらく」では、医療・福祉の現場で活躍している職員にフォーカスをあて、その実践を紹介しました。職員の活動を身近に感じることができれば嬉しいかぎりです。

ステークホルダーの皆さまの座談会では、情報発信とコミュニケーションのあり方についてご指摘いただきました。コミュニケーションはCSR活動の土台ですので、より皆さまから共感をいただけるような取り組みを整えていきます。

第三者意見として田中宏司先生からは、ISO26000への自主的な取り組みと、年度目標・計画についての実践実績・自己評価・次年度への課題などの視点からの総括が必要とご指摘いただきました。重要なアドバイスを受け止め、これから CSR活動に活かしたいと思います。

今後ともステークホルダーの皆さまと渓仁会グループを繋ぐ絆として、CSRレポートに報告すべき内容の充実を図っていきたいと考えております。

最後に、編集・発行にあたりご協力いただいたステークホルダーの皆さま、多くの職員に心より感謝申し上げます。

医療法人渓仁会 法人本部
CSR推進室 室長
奥田 龍人

各病院、施設、事業の実績データを収載した
「渓仁会グループ年次報告書」は、
渓仁会グループホームページをご覧ください。

渓仁会グループ年次報告書

検索

●編集事務局／

医療法人渓仁会 法人本部 CSR推進室

●発行年月／2009年12月

●次回発行予定／2010年10月を予定しております。

●発行責任部署および連絡先

医療法人渓仁会 法人本部

〒064-0823 札幌市中央区北3条西28丁目2番1号サンビル6F

TEL 011-641-9970(代) FAX 011-641-9951

E-mail : editor0110@keijinkai.or.jp

ずっと。



私たち渓仁会グループの仕事は、
あなたの病気を治すことだけでなく、
年齢に応じた健康維持のアドバイスをしたり、
介護を含めた老後の安心のお手伝いをすることでもあります。
心身ともに輝いて生きるために。
生涯にわたって渓仁会グループは、ずっとあなたのそばに。

渓仁会グループ

〒064-0823 札幌市中央区北3条西28丁目2番1号 サンビル6F
TEL 011-641-9970(代) FAX 011-641-9951

[渓仁会グループホームページ](#)

<http://www.keijinkai.com>

